

いしかり砂丘の風資料館紀要

第10巻

**BULLETIN OF THE ISHIKARI LOCAL MUSEUM**

**Volume 10**

**July, 2020**





口絵1. 石狩浜に漂着したプラスチック片.

2019年11月, 野外講座の参加者に「青いプラスチック」を拾い集めてもらったもの.  
右上: 漂着ゴミが集積した石狩浜のようす (2019年3月).

## 口絵 1. 石狩浜に漂着したプラスチック片 Plastic pieces drifted on Ishikari Beach, Hokkaido, Japan

プラスチックは、熱可塑性を持つ高分子化合物のうち、主に石油を原料とした合成樹脂である。軽い、腐食・変質しにくい、成形・着色が容易で大量生産が可能などの特長があり、第二次世界大戦後、急速に普及した。現在、世界で年間4億tのプラスチックが生産され、そのうち海洋への流入量は約1000万tと見積もられている (Jambeck *et al.*, 2015)。

2015年にアメリカ合衆国ニューヨークで開催された国連サミットにおいて、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、持続可能な開発目標 (SDGs) として17のゴールが設定された (United Nations, 2015)。その14番目が海洋・海洋資源の保全に関するものであり、青色のアイコンが設定されている。

北海道日本海側の石狩浜では、多くのプラスチック片の漂着が見られる。漂着量は秋季～春季にかけて多く、時に大量漂着も見られる。海上を浮遊しているものが北西季節風の卓越する冬季に石狩浜に吹き寄せられるケースと、春季の融雪水で流量が増加した石狩川経由で陸上から海洋へ流入し、河口周辺の砂浜に漂着するケースとが考えられる。プラスチック片に記されている文字やバーコードから推測できる流出源は、前者はロシア、韓国、中国・台湾など外国が目立ち、後者は日本国内である。国内製プラスチック片には、石狩川流域の地名等が記されたものも目立つ。

いしかり砂丘の風資料館主催の野外講座「石狩ビーチコマーズ／秋の海辺の漂着物」(2019年11月10日開催)では、SDGsのゴール14にちなみ、参加者に“青いプラスチック片を1人3つ見つける”というテーマを出した。その結果、大量の青色プラスチック片が採集された。

(志賀 健司)

### 引用文献

Jambeck, J. R., Geyer, R., Wilcox, C., Siegler, T. R., Perryman, M., Andrady, A., Narayan, R.,

Law, K. L., 2015. Plastic waste inputs from land into the ocean. *Science*, 347: 768-771.

United Nations, 2015. Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development.





↑ 汀線付近を浮遊するアカクラゲ。傘径約15cm。  
(2019年7月22日, 石狩浜)

2007年に見られたアカクラゲ。→  
(中央, 左下はミズクラゲ)  
(2007年7月19日, 石狩浜)



口絵2. 2019年に石狩浜で  
見られたアカクラゲ。

## 口絵2. 2019年に石狩浜で見られたアカクラゲ Japanese sea nettle observed on Ishikari Beach in 2019

アカクラゲ *Chrysaora pacifica* は日本列島周辺の暖流域で見られる刺胞動物門鉢虫綱のクラゲで、傘径10~20cm、40本ある触手は長さ2m以上になることもある。16本の放射状の赤い模様が旧日本軍の旭日旗のようにも見えることから「連隊旗クラゲ」という別名もある（峯水ほか, 2015）。刺胞毒は強く、重症例も知られている（谷内, 2017）。

北海道沿岸では、南部を除き通常は見られないが、2019年7月22日、石狩浜で複数個体が汀線直下を遊泳しているのが確認された。2007年~2009年にたびたび漂流・漂着が確認されたことがあるが、それ以来、石狩浜では10年ぶりの記録である。

(志賀 健司)



### 引用文献

峯水亮・久保田信・平野弥生・リンズィー, ドゥーグル, 2015. 日本クラゲ大図鑑. 平凡社.

谷内裕輔, 2017. アカクラゲ刺傷により高血圧性脳症を呈した5歳男児例. 金沢大学十全医学会雑誌, 126 (1): 2-7.

# いしかり砂丘の風資料館 紀要

第10巻

## 目次

### 論説

- 志賀 健司：北海道石狩海岸林東部の融雪プールの水量とキタホウネンエビ発生状況の  
2007年～2020年の変動 …1

### 報告

- 石橋 孝夫：北海道日本海側に分布する「越前狛犬」調査概報 …9
- 志賀 健司：石狩湾東部沿岸におけるウミガメ類ストランディングの記録 …33
- 荒山 千恵・石橋 孝夫：新たに見つかった石狩川の2種の鮭漁具について …39

### 口絵

- 石狩浜に漂着したプラスチック片 …i
- 2019年に石狩浜で見られたアカクラゲ …iii



# 北海道石狩海岸林東部の融雪プールの水量と キタハウネンエビ発生状況の2007年～2020年の変動

Annual changes of water amounts of vernal pools  
and abundance of fairy shrimp *Eubranchipus uchidai*  
in the eastern part of Ishikari coastal forest, Hokkaido, Japan  
from the year 2007 to 2020

志賀 健司\*

Kenji SHIGA\*

## 要 旨

石狩海岸林内で春季に出現する融雪プールの水量とキタハウネンエビの発生状況を、2007年から14年間に渡って観測した。その結果、プールの水量は5～10年スケールで増減していること、周辺地域の冬季の積雪量の増減に対応していることが明らかになった。また、キタハウネンエビ個体密度も数年スケールで変動しているが、プール水量の増減とは明瞭には対応していないことが判明した。

**キーワード：**融雪プール、キタハウネンエビ、石狩海岸林、花畔砂堤列、積雪量

## はじめに

石狩湾の湾奥部の砂浜および海岸砂丘のすぐ内陸には、海岸線と平行に、幅500m程度の帯状の石狩海岸林が広がっている。林内には、花畔砂堤列

(上杉・遠藤, 1973) と呼ばれる垂直方向1～2mの高低差が、水平方向20～30m間隔で繰り返す波状地形が見られる。冬期間の積雪が融ける4月初めには、砂堤間の低地に融雪水による一時的な細長い水体「融雪プール」が多数形成される(図

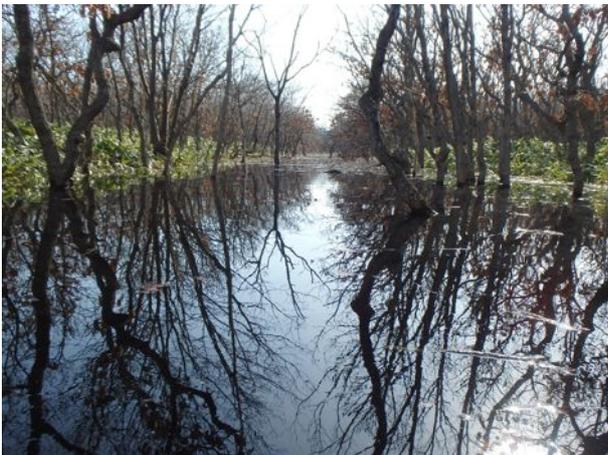


図1. 石狩海岸林内に形成された融雪プール  
(2015年4月30日)。



図2. 融雪プールが陸化した状態(図1と同地点、同方向、2020年6月4日)。

\* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

1) . 各プールの分布は砂堤列の形状に依存し、プールの数や面積、水量は年によって大きく変動する。水量の多い年のピーク時（4月下旬）には大規模なプールは長さ1 km程度、水深は1.5m近くに達するが、反対に融雪直後でも水体が全く見られない年もある。プールの水位は例年4月下旬以降しだいに低下し、5月中には大半のプールが消失して陸化する（図2）。水深1 mを越すような大規模なプールも例年7月までには干上がってしまう（五十嵐, 2006；志賀, 2012）。

融雪プールには、淡水生の甲殻類であるキタハウネンエビ *Eubranchipus uchidai*（シノニム：*Drepanosurus uchidai*）が発生する（Kikuchi, 1957；守屋, 1979；1985；1988；五十嵐, 2003）。キタハウネンエビは孵化後、約2～3週間で体長2 cmまで成長し（図3）、水中で産卵する。プールが干上がるとともに、あるいはその前に、成体は死滅するが、産み落とされた卵は夏季の乾燥や冬季の凍結に耐え、翌年以降の春季に再び融雪プールが形成された時に孵化する（五十嵐, 2006；守屋, 2011）。

キタハウネンエビの生息地は世界でも石狩海岸と青森県下北半島（大八木, 1996）の2地域しか確認されておらず、以前から青森県では最重要希少



図3. キタハウネンエビ *Eubranchipus uchidai* 成体。上がオス、下がメス。体長はどちらも約2 cm.

野生生物に指定されていた（青森県, 2020）が、2018年には環境省レッドリストにも、カテゴリーDD（情報不足）ではあるが、記載された（環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編, 2018）。また同年には、同じ *Eubranchipus* 属として新種3種の発見が報告されている（Takahashi *et al.*, 2018）。

近年の石狩海岸林内の融雪プールの分布や形成状況、キタハウネンエビの発生状況や個体群の数年スケールの短期的な変動は、志賀（2012）、濱崎ほか（2014）が報告している。また、1998年～2002年の5年間の変遷は五十嵐（2003）が詳細に報告しているが、10年を越えるような中～長期的な時間スケールではどのように変動しているか、傾向や周期性は見られるか、などは知られていない。今回、著者による継続的な調査結果が10年分を超えたので、ここに報告する。

#### 調査地と手法

石狩海岸林東部（石狩湾新港以東）のうち、例年融雪プールが最も多く形成される区域を2006年以降継続的に調査している（図4）。多数見られる細長いプールの中から主要なもの11ヶ所を定点観測しているが、今回の報告では、特に水量が多い2ヶ所、pool-1とpool-4（名称は守屋（1979）による）を取り上げる。pool-1は現在の海岸線と平行な方向に伸びる砂堤間低地に形成されるプールで、水量が多い年には長さ1 kmの連続した水体となる。pool-4は地形や産業廃棄物の存在から、砂堤間低地が改変された人為的な窪地と考えられるが、例年、水量の多いプールが形成され、キタハウネンエビもしばしば大量に発生することから、当初から観察・観測を続けている。

調査は2007年春のpool-4から開始した。最初はキタハウネンエビの発生状況の確認のみだったが、しだいに調査項目や対象プールを増やしてきた。pool-1の観測は2011年春からである。

春の融雪が進み部分的に地表面が見え始める時期（3月下旬）から、水量の多い大規模なプール

も干上がって消失する初夏（6月～7月）まで、原則として1週間に1回、林内を踏査して観察・観測を繰り返した。キタホウネンエビが発生する4月～5月は必要に応じて観測の頻度を増やした。

対象区域内では、確認されたプールのうち長さ1m以上のものの位置の記録（砂堤と平行方向に水体の両端の位置をGPS受信機と目視で記録）、主要なプール11ヶ所では表層水温と気温を計測し、プール最深部の水深をスケールを用いて計測した。また、踏査したすべてのプールでキタホウネンエビの有無を調べ、十分な個体数が確認されたプールでは、標本として数個体を採集し、冷凍

もしくは液浸（エタノール70%）標本とした。

キタホウネンエビの発生状況は主に目視により観察し、本研究では個体密度を次の基準で定性的に6段階の指数に区分した。

- 5：（very abundant）水面10cm四方から水中を覗いた際に、数個体以上を目視できる
- 4：（abundant）水面10cm四方から水中を覗いた際に、1個体程度を目視できる
- 3：（moderate）広く水面上から水中を見回した際に、数個体程度を目視できる
- 2：（rare）目視では確認できないが、開口径5～10cm程度の採集網を水中で振り回すと数個体程度を採集できる
- 1：（very rare）目視では確認できないが、開口径5～10cm程度の採集網を水中で繰り返し振り回すと1個体程度を採集できる
- 0：（barren）十分に時間をかけても目視も採集もできない

## 結果

### 1) pool-1

#### 水深

pool-1での観測は2011年から開始した。各年の最大水深（いずれも4月中旬に記録）は、2011年～2015年は連続して1mを越え、最も水量が多かった2013年は最大水深143cmに達した。2016年以降は水量の減少傾向が見られ、融雪直後の最深時でも水深は1mに達しなかった。2020年の最大水深は過去10年間で最も浅い35cmであった（表1、図5A）。

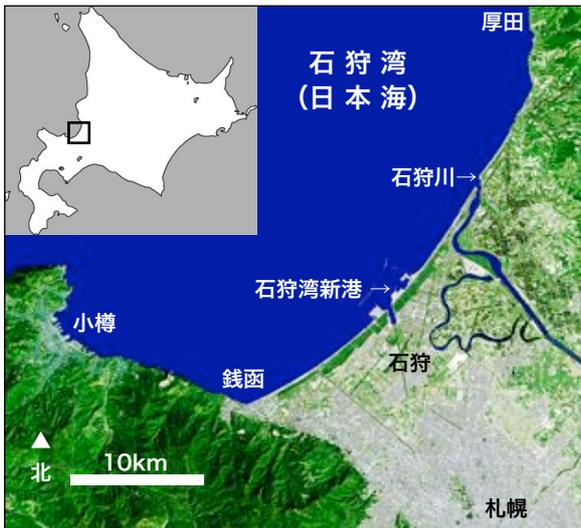
#### キタホウネンエビ個体密度

キタホウネンエビは、発生が確認できた年でも個体密度指数は1～3で、多くはない。水体が1ヶ月以上維持されていたのに生息がまったく確認されなかった（指数=0）年もある（図5B）。

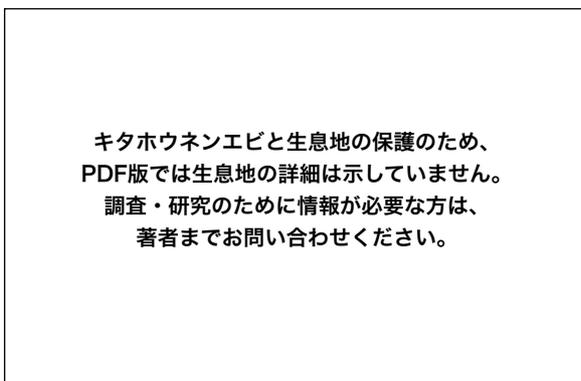
### 2) pool-4

#### 水深

pool-4の水深は2007年に観測を開始した。2007



A



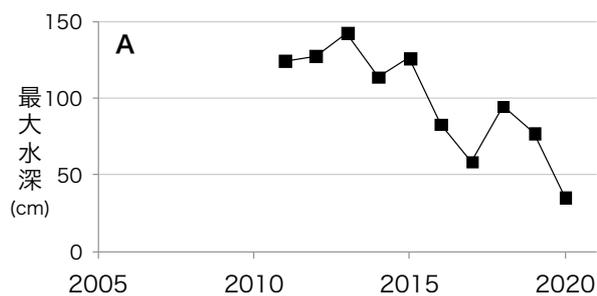
B

図4. 調査地域（☆）. BはAの☆周辺の拡大図。（「地理院地図」を使用）

表1. 2007年～2020年のpool-1, pool-4における年最大水深とキタホウネンエビの個体密度指数.  
5 : very abundant, 4 : abundant, 3 : moderate, 2 : rare, 1 ; very rare, 0 : barren.

年	pool-1		pool-4	
	最大水深 (cm)	個体密度	最大水深 (cm)	個体密度
2007	-	-	30	4
2008	-	-	22	3
2009	-	-	0	0
2010	-	-	58	4
2011	124	1	129	3
2012	128	2	125	3
2013	143	-	-	3
2014	114	2	114	3
2015	126	-	130	2
2016	83	-	92	4
2017	58	0	52	4
2018	94	-	92	1
2019	77	0	-	-
2020	35	3	18	5

### pool-1



### pool-4

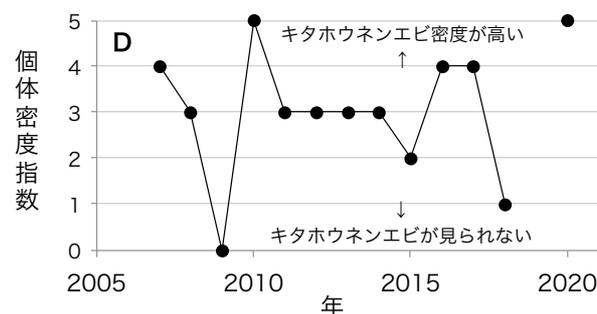
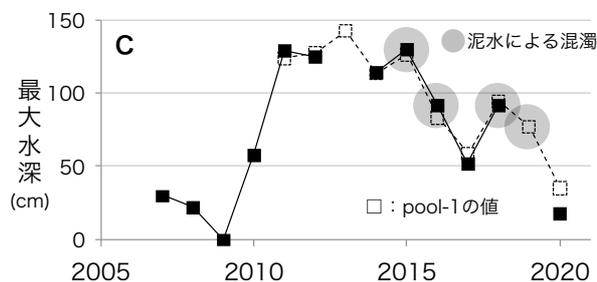


図5. pool-1とpool-4におけるキタホウネンエビ個体密度と年間最大水深の経年変化.

A : pool-1の最大水深, B : pool-1の個体密度指数.  
C : pool-4の最大水深, D : pool-4の個体密度指数.  
(水深はpool-1と4でほぼ同じ値のため, Cでは欠測分の参考値としてpool-1の値を並記した, )



図6. A : 2009年の融雪直後のpool-4. この年は水体は全く形成されなかった(2009年4月8日).  
B : 水量の豊富な年のpool-4 (2014年4月30日).

年～2010年は水量が少なく、特に2009年は残雪期から観察を続けたにも関わらず、周辺の積雪が全て消失しても水体は一度も見られないまま夏になった(図6). しかしその後の2011年～2015年はpool-1と同様に水量が多く、最大水深が1mを越える年が続いた. 2011年は水深129cm, 2015年は130cmに達した. しかし2016年以降はpool-1と同様、水量が年々減少している(図5C).

また、2015年、2016年、2018年、2019年には、プール形成初期で水位がまだ高い4月頃、水が顕著に混濁しているのが確認された(図7).



図7. 泥水によるpool-4の混濁. 2015, 2016, 2018, 2019年に見られた(写真は2018年4月23日).

水中が数cm程度しか見通せない状況が1～2週間継続した. 濁りは淡黄褐色で、高水位期に周囲から泥水が流入したと思われる. いずれの年も水位が低下すると透明度は回復した.

#### キタホウネンエビ個体密度

pool-4では、水体が形成されなかった2009年を除いて、毎春キタホウネンエビの発生が確認されている. ほとんどの年で指数3～4という、高い個体密度である. 特に2010年、2020年は、指数5 (very abundant) 規模の大量発生であった(図5D).

2015年以降の泥水流入があった年は、4月頃は混濁によってキタホウネンエビの有無が確認できなかったが、5月に入り水位が下がって透明度が回復した後は、毎年、生息が確認されている.

## 考 察

### 1) 積雪量と融雪プール水量との関係

プールの年最大水深の経年変化は、pool-1とpool-4ではほぼ同調している. 14年間のうち、2010年以前は低水位の傾向であり、2011年～2015年は高水位、2016年以降は再び低水位の傾向にある. おおよそ5～10年スケールで水量が変動していることが示唆されている. 本研究以前のpool-4の最

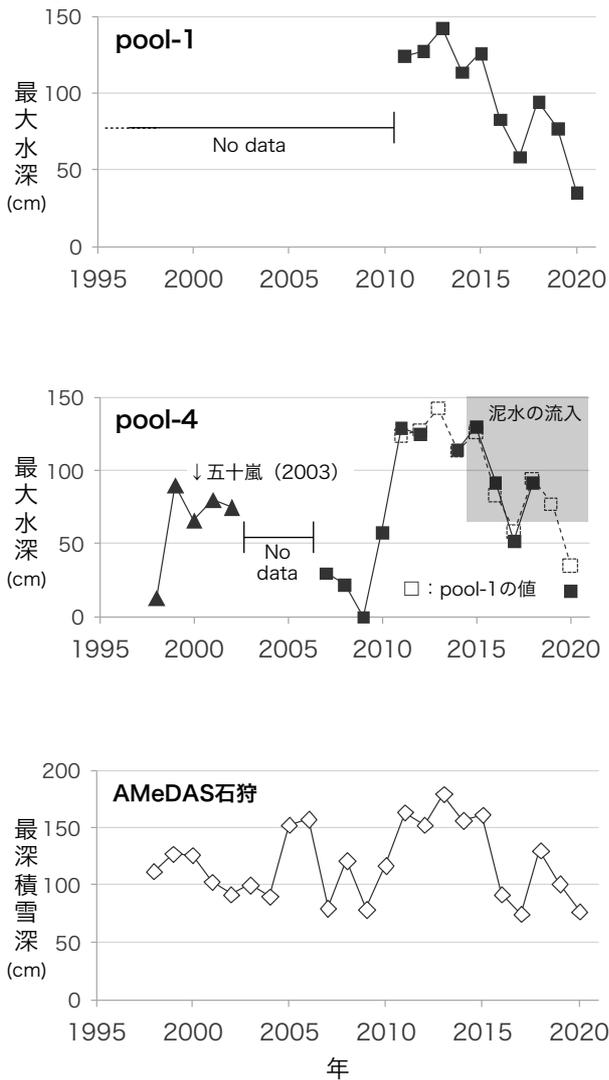


図8. 1998年以降の融雪プールの年最大水深と、AMeDAS石狩地点（気象庁）における年最深積雪深（寒候年）。pool-4の1998年～2002年は五十嵐（2003）の観測値より作図した。

大水深の経年変化として五十嵐（2003）の1998年～2002年の観測値があるが、1999年～2002年は比較的多い水量が記録されており、準周期的な変動として整合的である（図8）。

個々の融雪プールの水量が多い年は林内に分布するプール（水体）の数と面積も増加している。キタハウネンエビの生息域は少なくともこの20年程度の期間では、一方的に減少もしくは増加の傾向にあるわけではなく、準周期的に増減していると考えられる。

融雪プールの水の供給源は直前の冬期間の積雪であると予想されるが、年最大水深と年最深積雪深（AMeDAS「石狩」地点の値を使用、気象庁web site）の経年変化を比較すると、pool-1、pool-4とも、最大水深と積雪量とが明瞭な相関関係にあることがわかる（図8）。5～10年スケールの水量変動は、少なくとも石狩低地帯の規模以上の地域の降雪量変動を反映していると考えられる。あるいはさらに広域の気候変動を反映している可能性もあり、5～10年と見られる変動周期を考えると、例えばENSO（エルニーニョ南方振動）やPDO（太平洋十年規模振動）などが要因の候補として挙げられる。

## 2) 融雪プール水量とキタハウネンエビ発生状況との関係

プールの水量とキタハウネンエビの発生状況の関係を見てみると、2011年～2015年はpool-1、pool-4とも最大水深が1mを越えるほど水量が多いが、キタハウネンエビの個体密度は必ずしも高くはない。特に、最も長期間の連続データが記録されているpool-4を見ると、年最大水深が1mを越えるような年よりも、30cm～1m程度の水量の年に個体密度指数4～5規模の大量発生が確認されている（図5C、D）。水量が多いほど個体密度も高くなるわけではないことが明らかになった。

その理由としては、1) 卵が乾燥・凍結に耐えるキタハウネンエビは、孵化から産卵までの2～3週間だけ水体が維持されていれば十分であり、

水深が1 mを越すような水量があったところで発生・成長には特に有利にはならない、2) 低水温を好むキタホウネンエビは、水量が多い（水深が深い）と深層に集まり、水上からの目視や採集が困難になり、絶対数は多くても見かけ上は低密度に見える、などが考えられる。

pool-4でたびたび見られている泥水混濁は、2015年以降、水量が多い年に発生している。水深がおよそ70cmを越えるような水位に達すると、周囲からの泥水が流入するらしいことがわかった。2014年～2015年に隣接地の環境に何らかの変化があったことが推察されるが、泥水の起源は現時点では特定できていない。また、この状況が今後も継続した場合、キタホウネンエビの生息に影響があるかどうかは明らかではない。

### まとめ

石狩海岸林に形成される融雪プールの過去14年間に渡る定点調査の結果から、プールの水量は5～10年スケールで増減が繰り返されているらしいこと、水量は直前の冬の積雪量に依存することが明らかになった。また、キタホウネンエビも過去10年間ではほぼ継続して発生しているが、数年規模で個体数（あるいは密度）の増減を繰り返していることが確認された。

林内でも融雪プールが毎年形成される区域は限られていること、海岸林自体も隣接地の砂利採取や構造物の建設など、影響を受けつつあることを考慮すると、融雪プール、キタホウネンエビとも、将来に渡って維持され続けるかどうかは不明である。砂堤列と融雪プールという独特な自然環境の保全と、レッドリスト掲載種であるキタホウネンエビの保護のためには、継続的な調査と監視が不可欠である。

**謝辞：**キタホウネンエビ生息状況の調査にあたっては、北海道大学大学院環境科学院（当時）の濱崎真克さんと情報交換し、議論させていただいた。感謝いたします。

### 引用文献

- 青森県, 2020. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブック (2020年版) —.
- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編, 2018. 境省レッドリスト2018補遺資料. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室.
- 濱崎真克・守屋開・志賀健司・野田隆史, 2014. 石狩湾沿岸におけるキタホウネンエビ個体群の消長. 日本生態学会第61回全国大会（広島）要旨.
- 五十嵐聖貴, 2003. 石狩湾新港地域浮遊生物（キタホウネンエビ）調査報告書. 北海道環境科学研究センター.
- 五十嵐聖貴, 2006. キタホウネンエビ—石狩の林に棲む春の妖精—. 石狩海浜植物保護センター企画講座配布資料.
- Kikuchi, H., 1957. Occurrence of a new fairy shrimp, *Chirocephalopsis uchidai* sp. nov., from Hokkaido, Japan (Chirocephalidae, Anostraca). *Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Ser. 6, Zoology*, 13: 59-62.
- 気象庁, web site. AMeDAS石狩観測所最深積雪. 過去の気象データ検索. <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> (2020年4月閲覧).
- 守屋開, 1979. 融雪プールの動物プランクトン—石狩砂丘地帯を例として—. *環境科学*, 2: 23-38.
- Moriya, H., 1985. Notes on a fairy shrimp, *Eubbranchipus uchidai* (Kikuchi) (Anostraca), from Japan. *Hydrobiologia*, 120: 97-101.
- 守屋開, 1988. キタホウネンエビ (*Eubbranchipus uchidai*) の生息環境に関する研究. 昭和63年度北海道科学研究費による研究報告, 44-46. 北海道企画振興部.
- 守屋開, 2011. 希少種キタホウネンエビの生息する融雪プール. *北海道の自然*, 49: 46-54.
- 大八木昭, 1996. キタホウネンエビ *Eubbranchipus uchidai* Kikuchiの新生息地と生態. *青森自然誌研究*, 1: 25-30.
- 志賀健司, 2012. 石狩海岸林東部の融雪プールの2011年の分布と水位変動. *いしかり砂丘の風資料館紀要*, 2: 1-10.
- Takahashi, N., Kitano, T., Hatanaka, Y., Nagahata, Y., Tshistjakov, Y. A., Hamasaki, M., Moriya, H.,

Igarashi, K., Umetsu, K., 2018. Three new species of the fairy shrimp *Eubbranchipus* Verill, 1870 (Branchiopoda: Anostraca) from northern

Japan and far Eastern Russia. *BMC Zoology* 3, 5.  
上杉陽・遠藤邦彦, 1973. 石狩海岸平野の地形と土壌について. 第四紀研究, 12 : 115-124.

Annual changes of water amounts of vernal pools  
and abundance of fairy shrimp *Eubbranchipus uchidai*  
in the eastern part of Ishikari coastal forest, Hokkaido, Japan  
from the year 2007 to 2020

Kenji SHIGA

**Abstract**

Vernal pools in Ishikari coastal forest have been observed for 14 years from 2007. As a result, It was revealed that the amounts of water of major pools are fluctuating on a scale of several to decadal years, and correlate annual maximum snow accumulation of surrounding area. It was also found that the density of *Eubbranchipus uchidai* is fluctuating in several years, too, but it is not correlative clearly with water amounts of pools.

**Key words:** vernal pool, *Eubbranchipus uchidai*, Ishikari coastal forest, Bannaguro sand dunes, snow depth

# 北海道日本海側に分布する「越前狛犬」調査概報

Survey of *Echizen* stone-caved Guardian dogs  
distributed on the Japan Sea side of Hokkaido —Summary report—

石橋 孝夫\*

Takao ISHIBASHI\*

## 要 旨

2019年、北海道日本海沿岸にある「越前狛犬」の調査を実施した。調査範囲は、渡島半島の南端福島町から道央の石狩市浜益区までで、9神社11対の狛犬を調査した。その結果うち7対が「越前狛犬」だった。現時点では北海道内ではこれ以外の地域での「越前狛犬」は未確認である。これらの年代は16世紀から19世紀半ば（幕末期）までで、ほぼ6型式に分類が可能である。この中には、墨で瞳を書込んだ個体など、奉納の際に何らかの儀式をおこなったことを窺わせる個体もみられた。また「越前狛犬」ではないが、ほぼ同時代とみられる産地不明な「小型狛犬」や明治以降に製作された「笏谷石製狛犬」も確認され、合わせて記録した。

**キーワード**：越前狛犬，笏谷石，神殿狛犬

## 1. 「越前狛犬」とは何か

「越前狛犬」とは、そのほとんどが福井県福井市足羽山で産出する「笏谷石」（デイサイト質凝灰岩）で製作され、以下に示すような独特の型式をもった狛犬をいう（三井，2012；瓜生，2015）。年代的には16世紀初め（戦国時代）から19世紀半ば（江戸時代末）の間に製作された、この狛犬については、ほかに「白山狛犬」「三国湊狛犬」「越前禿狛犬」などの名称で呼ぶ研究者もいる。

石狩市内の2つの神社にも灰青緑色の凝灰岩製の小さな狛犬があり、後述するようにこれらも「越前狛犬」と考えられる。このうち石狩弁天社のものは以前から「笏谷石製の狛犬」として知られていた（田中，1967）。

北海道内の「越前狛犬」分布は渡島半島から北海道中央部までの日本海側に偏在し、今のところこの地域以外ではその存在は未確認である。この分布範囲は、かつての「和人地」から「西蝦夷

地」と呼ばれた地域の一部に該当してする。本州でのこの狛犬の分布は青森県から島根県付近までの日本海沿岸に分布している、北海道における「越前狛犬」の調査はこれまで活発でなく、近年の木戸奈央子による調査があるだけで、ほとんど手つかずとって良い（木戸，2014）。

筆者はかつて「越前狛犬」のある石狩弁天社の社史編纂（田中・石橋編，1994）に携わったことがあり、この時以来、この種の狛犬には少なからず関心をもっていた。その後、市内の北端、浜益神社の「越前狛犬」の紹介したことがある（石橋，2006）。

昨年、「越前狛犬」のふるさと福井市を訪れる機会があり、それを契機に北海道内の「越前狛犬」調査を思い立ち実施した。調査は継続中であるが、本稿はその概要報告である。

三井の研究によると「越前狛犬」の特徴は以下の3点にまとめられる（三井，2012）。

1. 笏谷石で作られていること。
2. 製作された年代は16世紀～19世紀中ごろ

\* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

である。

3. 越前生まれの独特の意匠・デザインが年代により変化する。

特に3については、さらに①体軀、②髪型、③尾、④施毛、⑤角・性器、⑥台座の形状の6点の特徴で大まかな型式分類が可能だとしている（三井, 2012 ; 2015）。

本調査でもこの分類を参考に調査を実施し、型式や年代等を検討した。本稿の記載中、この基準に根拠とした場合、「三井分類」と表記する。

また瓜生（2015）の研究によると「越前狛犬」に小型のものが多く理由は、笏谷石の採掘が「尺六」（高さ3尺（90cm）、幅1尺（30cm）、厚さ6寸（18cm））という単位で行われていることと関係しているという。

図1のように「越前狛犬」は「尺六」を2分割して1対の狛犬を作り出すことが可能で、この方法によった場合、1つの像は高さ45cm、横幅30cm、厚さ18cm以下のサイズに限定される。

また笏谷石の色は採掘される坑道により異なり、褐色や緑黄色、暗紫色などがあるという（吉澤, 2016）。しかし、「越前狛犬」に使用される笏谷石は、中でも軽石礫の含有が少なく「灰青緑色」がかかった石が好まれたようである。この種の石は「越前青石」や「青石」とも呼ばれ高価で取引されたようだ。

今回調査した北海道の「越前狛犬」も一部に火山礫を多量に含みやや白みがかかった色調のものもみられるが、多くは「灰青緑色」で火山礫が少ないものであり、「青石」や「越前青石」と呼ばれた石材で作成された狛犬とみられる。

なお、この「灰青緑色」の原因は笏谷石に含まれる「緑泥石類」のために発色するという（福井県自然環境保全調査研究会, 1999）。

笏谷石の採掘の歴史は古く、古墳時代までさかのぼり、福井県では5世紀に笏谷石製の石棺が出土しており、この時期には石の採掘が始まっていたことがわかる。

ちなみに北海道での最古の笏谷石製品は上ノ国町国指定史跡上之国勝山館跡から出土した火鉢で

ある（松崎・塚田, 2004）。この例から15世紀には笏谷石製品が北海道南部に持ち込まれていたことがわかる。近世ではその初期には松前江差（和人地）で墓石や敷石等に笏谷石が使用されるようになるが、これ以北では笏谷石製品はほとんど「越前狛犬」のみで、墓石等に使用されるようになったのは明治以降とみられる。

石狩市内の市営親船墓地、厚田区古潭墓地などで明治期から笏谷石の墓石や石仏が増加する。このほか、筆者は数十年前、浜益区で大量の笏谷石石材（「尺六」）が集積されていたのを見たことがあり、これなども明治大正期に運ばれた石材と思われる。

三井（2009）によると、大正4-5年の加納商店（福井市）の笏谷石材取引記録に「札幌市 小樽市 釧路市 函館市 深川市 歌棄郡 浦河町 登別」の地名がみられ、この石材が全道に普及したことがうかがえる。今回の調査で、乙部町や寿

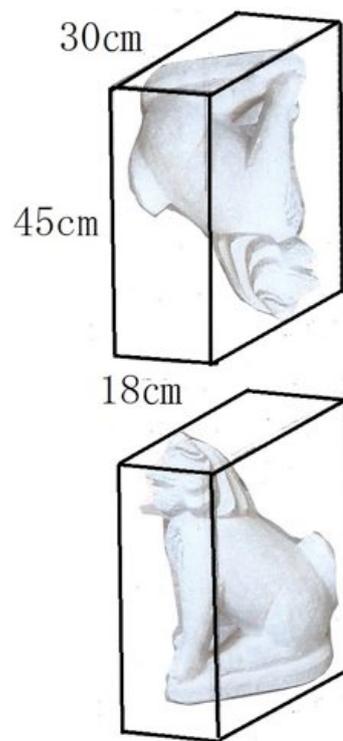


図1. 尺六から狛犬を作る。

都町で戦後、設置された神社碑（昭和37年）と記念碑（昭和30年）に笏谷石の使用例がみられ、昭和期にもこの石材の利用が続いていたことを知ることができた。なお笏谷石の採掘は1999年9月で終了している（吉澤, 2016）。

## 2. 「越前狛犬」調査地と調査方法

次に今回の調査について述べる。今回、「越前狛犬」調査で訪れた1市4町2村の9神社である（図2）。

また、狛犬の所在情報は主に市町村史、『北海道の狛犬』（丸瀬, 2007）や狛犬愛好家等のブログ（北海道Photo-撮り旅, 神社と狛犬見て歩き, 札幌時空逍遙）及び市町村学芸員からえた。調査は2019年8月から12月にかけて実施した。調査した神社のうち「越前狛犬」がある神社は6社で数は7対である。また4社で近世の産地不明の小型の狛犬と明治以降に「笏谷石」で作られた狛犬があり、これらの狛犬についても参考として

調査対象とし、それぞれ「笏谷石製狛犬」、「小型狛犬」と仮称した（表1）。

調査は写真撮影、計測、観察をおこない分類基準となる髪型、尾部の形状、台座の特徴を記録し

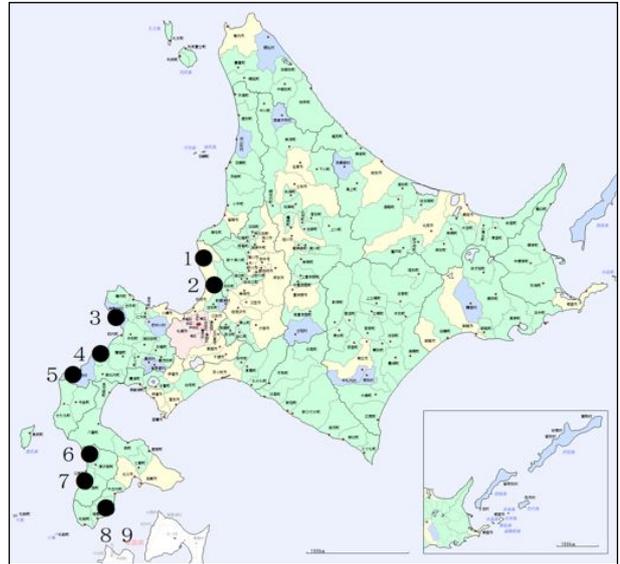


図2. 越前狛犬等調査神社位置図  
(CraftMAP使用)。

表1. 越前狛犬等調査地一覧（番号は図2と共通する）。

番号	市町村	神社名	調査した狛犬数	設置場所	狛犬の種類
1	石狩市	浜益神社	1対2体	屋外	越前狛犬
2	石狩市	石狩弁天社	1対2体	社殿内	越前狛犬
3	泊村	泊稲荷神社	1対2体	屋外	笏谷石製明治以降製作
4	寿都町	稲荷神社	1対2体	屋外	笏谷石製大正3年奉納
5	島牧村	巖島神社	1対2体	屋外	越前狛犬
		同上	1対2体	屋外	小型狛犬花崗岩製?
6	乙部町	八幡神社	1対2体	屋外	小型狛犬花崗岩製?
7	上ノ国町	上ノ國八幡宮	1対2体	社殿内	越前狛犬
		同上	1対2体	社殿内	越前狛犬
8	福島町	恵比寿神社	1対2体	回廊部	越前狛犬
9	福島町	八幡神社	1対2体	回廊部	越前狛犬

た。計測位置は図3に示したとおり、狛犬の「高さ」「横幅」「厚さ」、また台座の「長さ」「幅」「厚み」を巻き尺を使用し手計りした。なお狛犬は設置場所により、風化が激しいものもあり、十分な計測ができなかった資料もある。



図3. 狛犬の主要計測部位。

### 3. 調査記録

以下に今回調査し「越前狛犬」「笏谷石製狛犬」「小型狛犬」について記載する。

記載は図2に示した調査地の番号順である。

#### 1) 石狩市 浜益神社の越前狛犬(写真1)

##### ・神社の位置と由来

所在地：石狩市浜益区浜益227番地

神社の由来：浜益神社は天保2（1831）年創立の稲荷神社と同じく天保2年の創立の弁天社が大正14（1925）年合祀されてできた神社である。（石橋1980）。狛犬は現時点では北海道で一番北にある越前狛犬である。合祀の際の詳しい記録が残っていないので、この狛犬が本来どちらの神社にあったかなどは不明である。両神社はともに初代伊達林右衛門が創建したと伝えられる。とくに弁天社は「茂生村本陣前」にあったとされる。

この神社はハママシケ場所運上屋の神社として

建てられたとされる。ハママシケ場所はニシン場として有名だが良質な秋味（塩引き）生産地としても知られている。

##### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：白い御影石製狛犬の腹の下に入れられており、原位置は保っていないことは明らかである（写真1-1）。拝殿に向って右に阿形、左に吽形。風化が進み髪型の確認や尾の形状確認がかなり困難である。また足や台座が破損している。使用されている笏谷石の色はかなり青く、含まれる火山礫も少なく良質な笏谷石が用いられている。

②形態的特徴：阿形吽形ともに24～26cmの狛犬である。台座は阿形吽形ともに破損しているが、いずれも前側が方形で後方が半円形であることが確認できる。

風化のため表情や髪型が不鮮明であるが、阿形吽形ともに髪先端の確認でき、阿形の先端が丸まり房状になっている。これに対して吽形は直線的である。髪型の先端の形状からみて、阿形が三井分類の「房垂下型」（写真1-2）尾の型式は三井分類の「剣型」（写真1-3）と判断した。

これに対して吽形の髪型式は三井分類の「毛筋垂下型」（写真1-5）と考えられる。尾は剥がれ痕跡的であるが「蓮華花弁型」（写真1-6）と判断される。このように1対の狛犬中で型式が異なっており、その点で特異である。また台座は破損しているが阿形吽形とも前側が方形で後方が半円形で、三井分類の「前方後円型」である。

##### ③計測値

阿形：高さ24cm 横幅20cm 厚さ11cm

台座：長さ17cm 幅9cm 厚さ2cm

吽形：高さ26cm 横幅20cm 厚さ10cm

台座：長さ幅とも破損により計測不能 厚さ2cm

④総合所見：すでに述べたように、阿形と吽形はそれぞれ型式が異なる狛犬とみられる。その原因としてかつて型式の異なる2対の狛犬が存在していたが、それが社殿移転や合祀の際、何らかの理由により1対にされた可能性がある。恐らく像の

風化や破損などの理由で傷んだ像は廃棄し、傷んでいない阿形と吽形を組み合わせ1対にしたのではないだろうか。髪型・尾の型式からみて阿形は16世紀末～17世半、吽形は17世紀半～18世紀の「越前狛犬」と考えられる。

## 2) 石狩市 石狩弁天社の「越前狛犬」

(写真2)

### ・神社の位置と由来

所在地：石狩市弁天町18番地

神社の由来：元禄7（1694）年石狩川秋味上乘役松前藩士山下半右衛門の願いにより松前神明社神主白鳥若宮太夫がご神体を勧請し創立された神社である。祭神は巖島大明神で合殿妙亀法鮫大明神、稲荷大明神のほか毘沙門天、大黒尊天などが祀られている。

明治7（1874）年まで現在地より北東側の石狩川河口近くにあり、現在合殿となっている神々もかつてはそれぞれ独立した社があったようだが、遷座を契機に一つの社殿におさめられ現在にいたっている（田中・石橋, 1994）。

### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：社殿内の弁財天の前の神鏡の下段に向かいあわせて置かれている。向かって右に吽形、左に阿形の形で置かれている。像の状態は背面と尾の先端に若干、風化が認められるが、そのほかは劣化が認められず良好な状態である（写真2-2）。

②形態的特徴：眉毛が太く中央に粒状の装飾がみられる。阿形吽形ともに体が少し内側に傾くよう作られている（写真2-3, 6）。髭の表現があり、両前足上部に2本の波線による「施毛」がある（写真2-6）。両像のうち吽形の胸が平らに削られ正面から見るとU字型の平坦面が作り出されている（写真2-1）。阿形吽形双方の胸の部分に左から右に墨書がある（写真2-11）。このほかに目、歯、髭などに墨がついており、墨書と同時、おそらく奉納時に書き込まれた可能性が高い（写真

2-1, 10）。

このような墨による瞳などの描き入れは、何らかの儀式に伴っておこなわれたものと考えられる。このような例は後述する上ノ国町上ノ国八幡宮の狛犬にも認められる。

墨書の内容は阿形吽形ともに「庄内 酒田 柏屋 久左衛門 舟 中 上乃り 九兵エ 天党船」である（写真2-11）。この記述から「柏屋久左衛門」配下の「九兵エ」が「天党船」で石狩にきて奉納したことがわかる。「庄内 酒田」は寄港した港である。「柏屋久左衛門」は近江商人の又十藤野の関係者と思われる。石狩弁天社には文化11（1814）年の年号のある鰐口奉納者の1人に「柏屋善三郎」の名がある。この柏屋は石狩場所請負人の1人であり、柏屋と石狩弁天社の関係が以前からあったとみられる。

また石塚猛俊（1988）によると「天党船（てんとうぶね）」とは「天当船、天道船、伝道船」などとも書き、「近世から近代にかけて日本各地で最も広く使用されていた和船。一中略一大きさは地方によって異なり、富山県では長さ9尋（約13.6m）、肩幅9尺（約7m）、5挺櫂、7人乗りにものであった」という。東北地方ではさらに大型の天党船があったともいうが、この船は日本海周りの船で、5挺櫂、7人乗り程度の小型船と考えると大過ないと思う。赤羽正春（1998）によると富山県以北に広く分布する船で明治以降の「カワサキ船」につながる船でもあるという。カワサキ船では新潟からは松前まで10日間ほどの航海で到達したという。当時の船について千石船など大型船がイメージされがちであるが、天党船のような100石積み程度の小型船も頻繁に入津したものと思われる。この墨書から船の大きさが推定でき寄港地なども記され一種の航海記録となっている点でも重要である。

髪型は阿吽形ともに深い毛筋彫りで両頬の部分で大きく髪がカールする（写真2-4, 7）。三井分類の「巻毛・毛筋垂下型」である。尾の型式：阿吽形とも三井分類の「蓮華花卉型」（写真2-5）である。台座は前が四角で後方が半円形で前方後円

型である（写真2-9）。

### ③計測値

阿形：高さ24.6cm 横幅25cm 厚さ11.5cm

台座：長さ17.5cm 幅10cm 厚さ2.5cm

吽形：高さ25.1cm 横幅20.4cm 厚さ12.5cm

台座：長さ17.5cm 幅10.1 厚さ2.5cm

④総合所見：阿形と吽形はほぼ同じ形であるが吽形の胸の削り方だけが異なる（写真2-1）。これは雌雄の違いを示すなどの表現の可能性もあるが詳細は不明である。墨書や墨による腫などの描き入れがあり、奉納に際して何らかの儀式がおこなわれた可能性がありとくに貴重な史料である。奉納年は不明であるが髪型は三井分類の「巻毛・毛筋垂下型」・尾の型式は「蓮華花卉型」であり、17世紀半～18世紀かけて製作された「越前狛犬」と考えられる。

## 3) 泊村 泊稻荷神社の「笏谷石製狛犬」

(写真3)

### ・神社の位置と由来

所在地：泊村大字泊村82番地

神社の由来：古宇場所請負人田付新助（福島屋）が、家業の繁栄と場所の静謐を祈り、近江国田付家の家宝である神璽をトマリに祀ったのが創祀と伝えられる。更に享和元（1801）年京都伏見稲荷神社の神霊を祭神として祀り、弘化元（1844）年讃岐金比羅神社の分霊および播磨国海神社大海津見神の分霊を合祀した。文久2（1862）年場所請負人田付新兵衛・支配人増川市郎兵衛・浜名主和田屋力蔵などが出羽国塩越に注文起工し、彫刻を施した檜（けやき）材を弁財船で運び、釘を使用しない総檜造り楔止め組立の本殿を建築した（北海道神社庁HP）。

### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：狛犬は泊稻荷神社の境内であるが、社殿前に置かれているわけではなく、鳥居をくぐって参道右にある忠魂碑の基壇の下に置かれ、あたかも忠魂碑に付属する狛犬のような配置

となっている。碑に向かって左が阿形で右が吽形である。境内には狛犬のほかいくつかの石碑などがみられることから、別の神社にあった狛犬が移動してきた可能性がある。使用されている石には火山礫を多量に含む。風化によりそれが脱落した跡が無数の小穴となっている（写真3-1, 4）。当初は「笏谷石」ではないように思われたが、後述する島牧村の「越前狛犬」に使用されている笏谷石に類似した質の石が使用されていることや色調から「笏谷石」と判断した。

②形態的特徴：像全体の高さに比較して尾が大きく高い。尾の先端がほとんど後ろ髪に接している（写真3-2）。髪は細い沈線で彫られていて、頭部側面に大きな耳がつけられている（写真3-1）。また尾全体として三井分類の「蓮華花卉型」のような形であるが、その内部が5つに区画されており、内部に細い沈線が施されている。一見「笹の葉」のような形にみえる文様となっている（写真3-1, 3, 5）。このような構成の尾は三井分類にみられない。また台座の形状が長方形である。

### ③計測値

阿形：高さ45cm 横幅27cm 厚さ15cm

台座：長さ27cm 幅15cm 厚さ4cm, 長方形

吽形：高さ49cm 横幅27cm 厚さ15cm

台座：長さ27cm 幅15cm 厚さ8cm, 長方形

④総合所見：火山礫を多量に含む笏谷石を使用している。髪型は「越前狛犬」に類似する点もあるが、大きな耳が特徴である。狛犬の高さは2像合わせると90cmを超える。

瓜生（2015）によると笏谷石を使った狛犬は昭和期まで製作されていたという。その形状については不明であるが、使用石材が「笏谷石」と考えられること。耳の表現や台座形状が長方形であることから「越前狛犬」ではなく、それ以降に作られた「笏谷石製狛犬」と考えた。年代についてこの時期の類例が不明であるが、明治から大正期と想定しておきたい。

#### 4) 寿都町 稲荷神社の「笏谷石製狛犬」

(写真4)

##### ・神社の位置と由来

所在地：寿都町字磯谷町鮫取潤21番地

神社の由来：創立年代未詳。天保年間（1830～1843）に磯谷場所請負人の西川準兵が建立したことに始まる。明治11年11月に無格社に列せられ、同26年7月26日に改築の許可を得て、同年9月20日に落成、届けを出した（北海道神社庁HP）。

##### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：年代が新しく「越前狛犬」ではないが、その系譜をひく狛犬で一つの高さが70cmを超え、調査した中では最大で大型の狛犬である。

社殿前の左右に置かれる参道狛犬である。社殿に向かって右に阿形、左に吽形に配置されている。顔がやや斜めになるよう作られている（写真4-1）。狛犬と一体の台座のほかに、2段の台座がある。上段が笏谷石で下段はこの付近の海岸にあるハイアロクラストライトを加工し製作したとみられる（写真4-5）。阿形の2段目の台座側面に「奉納」、正面に「大正三年 三月酒井嘉兵衛」と刻まれている（写真4-1, 2）。吽形の方にも側面に「奉納」、正面に「酒井嘉兵衛」と刻まれている。また、拝殿入り口には笏谷石の敷石とみられる長方形の石が埋まっており、かつては他にも笏谷製品があった可能性がある。

②形態的特徴：像の高さが高く「尺六」でなく特注の石材で造られた狛犬とみられる。像の高さに匹敵するような高く（68cm）大な尾をもつ（写真4-4）。また全身に獅子毛に似た浮彫などの細かい装飾がみられる（写真4-6）。頭の両側に大きな耳がある（写真4-6）。この耳についてはすでに述べたように、泊村の泊稲荷神社の狛犬に類似した型式である。

##### ③計測値

阿形：高さ76cm 横幅47cm 厚さ29cm  
（尾の高さ70cm）

台座1：長さ49cm 幅30cm 厚さ11cm

台座2：長さ51cm 幅31cm 厚さ13cm  
（2段目の台座）

吽形：高さ76cm 横幅46cm 厚さ29cm  
（尾の高さ68cm）

台座1：長さ47cm 幅31cm 厚さ29cm

台座2：長さ66cm 幅21cm 厚さ21cm  
（2段目の台座）

④総合所見：奉納年から大正期の狛犬であり、「越前狛犬」ではないが、それ以降も「笏谷石」使った狛犬製作継続したことを示す資料である。近世以降の笏谷石製の狛犬の型式がどのような変遷をたどるのか把握していないが、今後この種の狛犬がこの地域あるいは北海道内にどのような分布を示すのか知る上で興味深い資料であり、注目される。

#### 5) 島牧村 巖島神社の「越前狛犬」と

「小型狛犬」（写真5）

##### ・神社の位置と由来

所在地：島牧村字泊

神社の由来：創立年代未詳。享和3（1803）年7月に改修の銘が残っており、天保8（1837）年にも再度改修されている。また神社には辨財天の木像が祀られており銘に「西蝦夷島小牧江初而奉納願主某享和三癸亥年七月吉日修復、依而開眼浅間神社神主木村兵部源勝政謹而之を修む。元治甲子曆正月修復願主松前村山伝兵衛直之代等」とある。明治9年郷社に列せられる（北海道神社庁HP）。

##### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：この神社では大小2対の狛犬が拝殿前の左右にコンクリートの台に乗せられていた。このうち大型の狛犬の阿吽像は向かい合わせでなく、それぞれ海を見るように配置されている（写真5-3）。拝殿に向かって右に阿形、左に吽形が置かれている。

大型の狛犬は先に述べた泊村の泊稲荷神社の「笏谷石製狛犬」と石の質感が良く似ており、含

まれていた火山礫が風化により脱落し、無数の穴が開いている。海に向けた顔などは激しく風化し、かろうじて阿吽が判断できる状態で表情などの観察は難しい(写真5-1)。これに対し反対側の髪型や尾の形状は、全面より状態が良く、かなり良く観察できる(写真5-3)。髪の様式や尾の形状から「越前狛犬」と判断した(写真5-3)。

大型の狛犬と並んで風化した花崗岩のような白っぽく、ザラザラした手触りの石製小型狛犬が石製ご神燈の擬宝珠とともにコンクリート製台座に載せられている(写真5-5)。

②形態的特徴：像の高さがいずれも50cmを超え「尺六」でなく特注の石材から製作したと考えられる。髪型は三井分類の「毛筋垂下型」であるが掘り込みは浅く線状である。背にかかる髪の先端は折れ線グラフ状になっている(写真5-2)。風化によりはつきりしないが頭頂部は房状の巻毛の集合の可能性がある。尾は三井分類の「蓮華花卉型」に類似しているが、阿形吽形ともに台座に近い部分に円形の大きな穴がみられる(写真5-4)。原形は不明だが阿吽像ともにあることから、円形の装飾が脱落したと考えられる。

おそらく三井分類でいう渦巻き状の「蝸牛型」と呼ばれる尾のような装飾があった可能性が高いが詳細は不明である。台座形状は「前方後円型」である。

### ③計測値

阿形：高さ51cm 横幅36cm 厚さ24cm

台座：長さ34cm 幅19cm 厚さ3cm

吽形：高さ56cm 横幅39cm 厚さ24cm

台座：長さ35cm 幅18cm 厚さ3cm

④総合所見：高さ45cmを超える特注の石材から製作された狛犬である。したがって奉納者あるいは発注者が「尺六」の規制を超える石材を入手する力があったことが考えられる。髪型は三井分類の「毛筋・垂下型」の範疇に入るが、尾の形状は三井分類の「蓮華花卉型」の下部に渦巻き状の装飾がついた「蝸牛型」の一種の可能性があり、分類はなお検討を要するが年代については一応17世紀～18世紀ものとしておきたい。

### ・小型狛犬の概要

①設置位置と状態：上記の「越前狛犬」に並んで花崗岩様の白っぽくザラザラした手触りの石で作られた小型狛犬がおかれている(写真5-3)。風化が進み、阿吽の区別もつかない。台座は前足側が半ばから折れて欠損している(写真5-5, 7, 8)。

②形態的特徴：風化により髪型は不明である。台座は狛犬臀部と一体化しているが半円形であることから台座は「前方後円型」に類似している(写真5-7)。なお、大きさからみてかつては社殿内にあった神殿狛犬の可能性はある。

### ③計測値:

阿形：高さ34cm 横幅22cm 厚さ12cm

台座：長さ17cm 幅12cm 厚さ未計測

吽形：高さ34cm 横幅22cm 厚さ12cm

台座：長さ17cm 幅12cm 厚さ未計測

④総合所見：狛犬の姿勢から、後述する乙部町八幡神社の狛犬と同形で、「越前狛犬」とも共通している。この点から狛犬の年代は近世期と思われる。

### 6) 乙部町 八幡神社の「小型狛犬」(写真6)

#### ・神社の位置と由来

所在地：乙部町栄浜

神社の由来：創立年代は元和年間(1615～1624)、文化9(1812)年再建された。明治41(1908)年稲荷神社を合祀する。なお稲荷神社は寛永5(1628)年創祀(北海道神社庁HP)。

#### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：前項島牧村厳島神社の小型狛犬の項で述べたが、これとよく似た形状の狛犬であり「越前狛犬」ではないことは明らかである。参道に置かれているが破損したご神燈の笠石を台座にしており、明治41年合祀された稲荷神社の神殿狛犬だった可能性がある。石材は風化した花崗岩のようなザラザラした手触りの石である(写真6-3)。

②形態的特徴：風化が激しく阿吽の別も明瞭でなく、両方とも吽形にみえる。髪型はわずかに肩にかかるほどの長さで毛先が房状になっている状態がわずかに観察できる。尾はほとんどみられない（写真6-1, 3, 7）。

像の側面観は胸を突き出し、臀部が台座からかなりはみ出す形で「越前狛犬」でないものの三井分類では「(3B) 鋭角三角形型」に近い形である（写真6-2, 6）。尾はほとんどなく、特徴的な形状をしている。島牧村厳島神社の小型狛犬も台座から臀部がはみ出すが、これほど極端ではない。台座形状は前方が方形で後方が半円形で「前方後円型」で「越前狛犬」と同じである（写真6-4）。

### ③計測値

左の狛犬：高さ36cm 横幅28cm 厚さ14cm

台座：長さ20cm 幅14cm 厚さ3cm

右の狛犬：高さ36cm 横幅28cm 厚さ14cm

台座：長さ20cm 幅14cm 厚さ4.5cm

④総合所見：風化のため形状が定かでない点が多いが、石質は明らかに笏谷石でない。小型であり全体形状は「越前狛犬」に類似している。台座の形状も前が方形で後ろが半円形ぎみで「前方後円型」に似るが、台座は狛犬の臀部と一体化しており特異な形状を示している（写真6-6）。像の側面観（体躯）は三井分類の「(3B) 鋭角三角形型」に近く、「越前狛犬」であれば17世紀後半から18世紀に主流となる形だと考えられる。石質は風化が進んだ花崗岩のような感じである。強いていえば「佐渡御影」などと呼ばれる石に似た感じがある。おそらく江戸時代の狛犬とみられる。今後、製作地や年代を確定する必要がある。

## 7) 上ノ国町 上ノ国八幡宮の「越前狛犬」

(写真7)

### ・神社の位置と由来

所在地：上ノ国町字上ノ国町238番地

神社の由来：創建は、文明5（1473）年松前藩始祖「武田信廣」公が勝山館（現国指定史跡「勝山

館」跡）に守護神として創祀、館神（館神八幡宮）と称した。永正11（1514）年2代光廣が大館（松前）に本拠を移し5代慶廣の時豊臣秀吉・徳川家康によって蝦夷島主と認められ、安東氏より独立するに至り、姓を松前と改め後に江戸幕府下の1藩として位置した。上ノ国は、藩祖草創の地として藩主の直領とされ当社は上ノ国三社（現・夷王山神社、砂館神社と併せて上ノ国三社という）の1社で、松前藩の崇敬殊に厚く、他2社と共に歴代藩主は1代に1度必ず参詣し、毎年正月には藩主名代が代参する慣しであった。現本殿は元禄12（1699）年建立の一間社流れ造り（一部彩色）の本殿を明治時代に勝山館より遷し伝説「大蔵鯨」の若宮社他を合祀している（北海道神社庁HP）。

### ・狛犬の概要

①設置位置と状態：狛犬は2対4体あり、いずれも「越前狛犬」である。2対とも拝殿前に置かれており、神殿狛犬である。通常非公開である。2対の狛犬は『上ノ国町史』（松崎, 1962）と『越前笏谷石第三編』（三井, 2009）で紹介されている。神殿狛犬ということもあり、風化もなく良好な状態である。以下「越前狛犬A」、「越前狛犬B」として記載する。

### ・越前狛犬A

②形態的特徴：石狩市浜益神社の「越前狛犬」のうち吽形と同石狩弁天社と同型式であるが、これらに比べ高さが3cmほど高い。また、石狩弁天社の狛犬の特徴で記載した胸の面取りは阿形吽形両像に認められる（写真7-2）。

吽形の左足から台座にかけて欠損している。阿形吽形ともに体及び顔を少し内側に傾けた形となっている。これも石狩弁天社の狛犬と同様である（写真7-1）。

阿像の口、目が黒くなっており、墨で瞳を書き入れた痕跡とみられる（写真7-2）。石狩弁天社の例から神社に狛犬を奉納する際の儀礼による可能性が高い。吽形も同様に墨による瞳などの書入れがあったと思われるが、現在でははっきり確認で

きない。このような例が本州側にもあるのか調べる必要がある。

髪型は耳でカールする（写真7-3）。尾は石狩弁天社と同系であるが、尾の大きさは石狩弁天社に比較して大形である（写真7-4）。台座形状は前が方形で後部が半円形で三井分類の「前方後円型」である。

阿形吽形とも胸と両足側面に刻字がみられる（写真7-2, 5）。胸には「奉寄進」。右足側面、左足側面に「越前新保」と「三上万■■■」と刻まれている。「越前新保」とは現福井県三国町にある地名で九頭竜川河口にあり、笏谷石の積み出された近世の港で三上何某はこの商人とみられ、いわゆる北前船主の可能性があり、現在調査中である。

### ③計測値

阿形：高さ27cm 横幅20cm 厚さ15cm

台座：未計測 前方後円型

吽形：高さ28cm 横幅19cm 厚さ16cm

（右前足と台座一部欠損あり）

台座：高さ未計測 厚さ1.5cm 前方後円型

④総合所見：髪型は三井分類の「巻毛・毛筋垂下型」、尾の型式は「蓮花花卉型」である（図は写真7-3, 4）。髪型は髪の毛の束や毛先がやや丸みを帯び、尾も非常に大きい。墨により瞳などを描いた痕跡があり、口にも墨の痕跡がうかがわれる。なお狛犬Bも同様に墨で瞳が描かれている。17世紀半～18世紀の「越前狛犬」と考えられる。

#### ・越前狛犬B

①形態体的特徴：前記の「越前狛犬A」とは明らかに別型式である（写真7-6）。頭部に最大幅があり、房状に編んだ髪型（自由型）が特徴である（写真7-7, 8）。尾部はかなり特異で基部が剣型のように細いが、先端が火炎状で3つの部分に分かれている。左右に渦巻き状の装飾を施す（写真7-10）。

狛犬Aに比べ石の色はやや青白い。両前肢付根に羽根状の旋毛がある（写真7-9）。前足後足ともに爪の表現が顕著である。台座は前後とも丸みを

帯び楕円形である。この狛犬にも墨で目が描かれ痕跡が残る。とくに吽像の右目は顕著である。阿吽ともわずかに体が内側に傾くよう作られている。

### ③計測値

阿像：高さ38cm 横幅26cm 厚さ15cm（頭部幅）

台座：長さ22cm 幅13cm 厚さ2cm

吽像：高さ37cm 横幅25cm 厚さ14cm（頭部幅）

台座：長さ23cm 幅12cm 厚さ2cm

④総合所見：尾の形状と髪型がとくに目を引く。とくに尾の形状は根元が剣状で先端に向かって火炎が燃え上がるようで装飾的であるが、三井分類ではこのような例は掲載されていないようである。また髪型は房状に編まれたような形で、表情も特徴的である。このような特徴から三井分類の「自由型」の髪型と考えられ、この狛犬は19世紀半、幕末期の狛犬と考えられる。

## 8) 福島町 恵比須神社の「越前狛犬」

（写真8）

### ・神社の位置と由来

所在地：福島町宮歌

神社の由来：由来は不詳であるが、地元では「恵比須神社」と呼ばれているところから『福島町史第2巻』（福島町, 1995）にある宝暦10（1760）年村中建立の神社と思われる。場所は次に述べる八幡神社の社地内で本殿の背後にある。配置からみて八幡神社の境内社のような扱いで存続してきたと考えられる。

### ・狛犬の概要

①設置位置・状態：流造りの社殿の回廊部分に右に吽形、左に阿形が置かれている。狛犬は対向しておらず海を向くように配置されている。置かれた位置には屋根がかかっているが、海に向いている前面はかなり風化しており、観察がむづかしい。

②形態的特徴：阿形は顔を上向きにしている（写

真8-1) . 髪型は先端が巻き毛で2段から3段の房状となっており、三井分類の「多段房型」に類似する。吽形の方が良好に保たれている(写真8-6) . 尾の形は三井分類では「3条(房)のその他A型」に近い。この形の尾は中央が蓮華花卉のように直立し、左右に蕨手状の装飾がつくものである。

この神社の狛犬も風化が激しいがこれと同様な型式の尾と考えられる(写真8-3, 7) .

また、阿形の股間に小さな突起の痕跡があり、性器の表現の可能性がある(写真8-4) .

台座の形状は前側が方形で後ろが半円形であり、「前方後円型」である(写真8-7) .

### ③計測値

阿像：高さ34.5cm 横幅未計測 厚さ16.5cm

台座：長さ25cm 幅14.5cm 厚さ3cm

吽像：高さ34.5cm 横幅未計測 厚さ17cm

台座：長さ25cm 幅14cm 厚さ3cm

④総合所見：風化により十分観察できないが、髪型は三井分類の「多段房巻」、尾も「3条その他型A」の「越前狛犬」に類似している。この観察が正しいとすれば年代は16世紀～17世紀と思われる。また股間の小さな突起は「性器」表現の可能性があるが、さらに詳しい観察や類例調査が必要である。

## 9) 福島町 八幡神社の「越前狛犬」(写真9)

### ・神社の位置と由来

所在地：福島町宮歌

神社の由来：明暦元(1655)年知行主幕府旗本松前八左衛門泰広が、知行地の平安を祈り建立し、正八幡宮ともいわれ、八左衛門使用の弓矢、連歌、鬮(くじ)箱等を献納した。草創時の棟札が現在も残されており、当初の別当は泉蔵坊で、のち藤枝家が代々これを勤めた。その後元禄8(1695)年、延享4(1747)年、安永4(1775)年と新社殿を造立している。この八幡社には近世初頭から明治にいたる宮歌村文書87点が保存されていて、北海道内では1村古文書として

貴重なものであると、評価されている(福島町、1995) .

### ・狛犬の概要

①設置位置・状態：前記恵比須神社と同じく、流造の回廊部分の左右に置かれ、向かい合わせでなく顔を海に向けて置かれている。向かって右に阿形、左が吽形となっており恵比須社とは配置が逆になっている。阿形吽形とも顔面、足、台座が破損しており、コンクリートで修復した跡がある。しかし、再び破損して像の下にコンクリートが散乱しており状態は非常に悪い(写真9-5) .

②形態的特徴：髪型は三井分類の「毛筋垂下型」である(写真9-1) . 尾の型式は三井分類の「先端内巻型B」である(写真9-2, 3) . また阿形吽形像ともに頭頂部に楕円形の溝で区画された楕円形の高まりがある。髪装飾ともみられるが、低ながら突起と考えた。おそらくこの突起は、「角」の表現あるいは名残と考えられる(写真9-4, 7) .

著者は「角」もつ狛犬を見たことはなく、このよう低い「角」があるかどうか分からない。今後、「越前狛犬」に限らずこのような例の有無を調査したい。

なお、先に述べたように狛犬は風化により、破損しコンクリートで数度の補修が行われている。とくに台座部分や前肢は大幅で、この部分の計測値は参考値である。台座の形状は三井分類の「前方後円型」である(写真9-6) .

### ③計測値

阿形：高さ42cm 横幅35cm 厚さ15cm

台座：長さ40cm 幅22cm 厚さ4cm

吽形：高さ41cm 横幅35cm 厚さ16cm

台座：長さ40cm 幅29cm 厚さ4cm

④総合所見：髪型は三井分類の「毛筋垂下型」、尾の型式は「先端内巻型B」であることから、16世紀～17世紀初めの「越前狛犬」と考えられる。

この狛犬には「角」の痕跡とみられる低い突起がみられた。「角」とすれば阿吽両形にあるのは珍しい例と思われる。例えば明治32年の「神職宝

鑑」（半井，1899）によると呷形にだけあり，阿形にはみられない。

#### 4. まとめ

以上，北海道日本海側の神社に奉納されている「越前狛犬」及び関連する狛犬の調査をおこないその概要を述べた。今回の調査では，道南部福島町から道央の石狩市浜益区まで9神社で7対の「越前狛犬」と2対の近世「小型狛犬」と2対の「笏谷石製狛犬」が確認できた。

「越前狛犬」については三井紀生（2015）の分類を参考すると16世紀から19世紀半ばまでのものと推定され，ほぼ6型式の狛犬が認められた。

この中には，奉納者が記入されたものや墨で眼や髭を画き込んだ個体も認められ奉納儀式をうかがわせる例も確認できた。このほか幕末以降に製作されたと考えられる「笏谷石製狛犬」と製作地不明な近世の「小型狛犬」も確認された。

また石狩弁天社や上ノ国八幡宮の例でみたような墨による目腫などの描き入れが具体的にどのような場合行われたかなど民俗学的視点での調査も必要である。さらに乙部町や島牧村などでみられた「小型狛犬」が何時，どこで製作されたかなど調査する必要がある。

「越前狛犬」が比較的小型であることから，未確認の狛犬がまだ社殿内に存在する可能性がありさらに所在確認調査を進める必要がある。

**付記：**今回調査した「越前狛犬」は凝灰岩製で風化しやすくすでに脆くなっているものが多い。見学の際などは誤って破損しないように十分注意する必要がある。また上ノ国八幡宮の越前狛犬については通常非公開であること申し添えます。

**謝辞：**今回の越前狛犬等の調査にあたり，下記の方々からご教示・ご指導を賜った。記して感謝の意を表します。福井県立歴史博物館，福井市立図書館，上ノ国八幡宮 宮司松崎辰彦，上ノ国町学芸員塚田直哉，福島町学芸員 鈴木志穂。（敬称略）

#### 引用文献

- 赤羽正春，1998. 日本海漁業と漁船の系譜. 慶友社.
- 福井県自然環境保全調査研究会監修，1999. 福井県のすぐれた自然 地形・地質編. 福井県県民生活部自然保護課.
- 福島町，1995. 福島町史第2巻. 福島町.
- 北海道神社庁，web site. 北海道の神社 後志支部，檜山支部. <https://hokkaidojinjacho.jp/jinja/>（2019年12月閲覧）.
- 石橋源，1980. 浜益村史. 浜益村.
- 石橋孝夫，2006. 石狩弁天社の狛犬. Estuary（いしかり砂丘の風資料館だより），24：1.
- 石塚猛俊，1988. てんとうぶね 天当船. 世界大百科事典19. 平凡社.
- 木戸奈央子，2014. 石狩弁天社の笏谷石製狛犬. いしかり砂丘風資料館紀要，4：1-6.
- 丸瀬正弘，2007. ほっかいどうの狛犬. 中西出版.
- 松崎岩穂，1962. 上ノ国村史. 上ノ国町.
- 松崎水穂・塚田直哉，2004. 史跡上之國勝山館跡XXV 平成15年度発掘調査環境整備事業概要，75-85.
- 三井紀生，2009. 越前笏谷石 第3編 よみがえる歴史と人間像. 福井新聞社.
- 三井紀生，2012. 中・近世における越前狛犬の特徴と地方進出について. 若悦郷土研究，57(1)：1-25.
- 三井紀生，2015. 越前狛犬の意匠・造形の変遷について. 日引（石造物研究会会誌），14：9-25.
- 半井真澄，1899. 神職宝鑑. 国立国会図書館デジタルライブラリー.
- 田中實，1967. 石狩弁天社史 石狩町郷土史料第二輯. 石狩町教育委員会・石狩町郷土研究会.
- 田中實・石橋孝夫編，1994. 石狩辨天社創建三百年記念誌 石狩辨天社史. 石狩辨天社創建三百年記念誌実行委員会.
- 瓜生由紀，2015. 「越前狛犬」（笏谷石製の狛犬）の分析 福井市美山地区の調査結果を中心として. 福井県立歴史博物館紀要，11：1-16.
- 吉澤康暢，2016. 笏谷石と緑色凝灰岩類の化学組成. 福井市自然史博物館研究報告，63：17-26.
- その他ホームページ等：
- coachman，web site. 北海道Photo-撮り旅. <https://photo2519.exblog.jp/>（2019年12月閲覧）.

keystonesapporo, web site. 札幌時空逍遙.

[keystonesapporo.blog.fc2.com/blog-entry-459.html](https://keystonesapporo.blog.fc2.com/blog-entry-459.html) (2019年12月閲覧) .

作者未表記, web site. 神社と狛犬見て歩き. <https://blog.goo.ne.jp/goo20052010> (2019年12月閲覧) .

表 2 a. 越前狛犬等の集計表（1）.

(H：高さ, W：横幅, T：厚さ, 台座 L：長さ, W：幅, T：厚さ, \*：欠測)

1) 石狩市 浜益神社の「越前狛犬」

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H24×W20×T11		吽 形	H26×W20×T10	
台 座	L17×W9×T2		台 座	L*×W*×T2	*破損
髪の様式	房垂下型		髪の様式	毛筋垂下型	
尾の様式	剣 型		尾の様式	蓮華花卉型	
年代推定	16世紀末～17世紀半		年代推定	17世紀半～18世紀	

2) 石狩市 石狩弁天社の「越前狛犬」

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H24.6×W25×T11.5		吽 形	H25.1×W20.4×T12.5	
台 座	L17.5×W10×T2.5		台 座	L17.5×W10.1×T2.5	
髪の様式	巻毛・毛筋垂下型		髪の様式	巻毛・毛筋垂下型	
尾の様式	蓮華花卉型		尾の様式	蓮華花卉型	
年代推定	17世紀半～18世紀		年代推定	17世紀半～18世紀	

3) 泊村 泊稻荷神社の「笏谷石製狛犬」

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H45×W27×T15		吽 形	H49×W27×T15	
台 座	L27×W15×T4		台 座	L27×W15×T8	
髪の様式	型式不明 耳がある		髪の様式	型式不明 耳がある	
尾の様式	蓮華花卉型類似 笹葉状		尾の様式	蓮華花卉型類似 笹葉状	
年代推定	明治・大正期か？		年代推定	明治・大正期か？	

表2b. 越前狛犬等の集計表(2).

(H:高さ, W:横幅, T:厚さ, 台座L:長さ, W:幅, T:厚さ, \*:欠測)

4) 寿都町 稲荷神社の「笏谷石製狛犬」

阿 形			咩 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H76×T47×W29		咩形全体	H76×T46×W29	
台 座	L49×W30×T11		台 座	L47×W31×T29	
髪の様式	型式不明 耳がある		髪の様式	型式不明 耳がある	
尾の様式	型式不明 大型		尾の形式	型式不明 大型	
年 代	大正3年(酒井嘉兵衛奉納)		年 代	大正3年(酒井嘉兵衛奉納)	

5) 島牧村 巖島神社の「越前狛犬」と「小型狛犬」

「越前狛犬」

阿 形			咩 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H51×W36×T24		咩 形	H56×W39×T24	
台 座	L34×W19×T3	欠 損	台 座	L35×W18×T3	
髪の様式	毛筋垂下型?		髪の様式	毛筋垂下型?	
尾の様式	蝸牛型?		尾の様式	蝸牛型?	
年代推定	17世紀~18世紀		年代推定	17世紀~18世紀	

「小型狛犬」

阿 形			咩 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H34×W22×T12		咩 形	H34×L22×T12	
台 座	L17×W12×T*	欠 損	台 座	L17×W12×T*	欠 損
髪の様式	不 明		髪の様式	不 明	
尾の形式	不 明		尾の形式	不 明	
年代推定	近 世		年代推定	近 世	
その他	石質不明		その他	石質不明	

表 2c. 越前狛犬等の集計表 (3) .

(H：高さ, W：横幅, T：厚さ, 台座 L：長さ, W：幅, T：厚さ, \*：欠測)

6) 乙部町 八幡神社の「小型狛犬」

左 像			右 像		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
左 像	H36×W28×T14		右 像	H36×W28×T14	
台 座	L20×W14×T3		台 座	20×14×4.5	
髪の様式	不 明		髪の様式	不 明	
尾の様式	不 明		尾の様式	不 明	
年代推定	江戸時代		年代推定	江戸時代	
その他	石質不明		その他	石質不明	

7) 上ノ国町 上ノ國八幡宮の「越前狛犬」 A, B

狛 犬 A

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H27×W20×T15		吽 形	H28×W19×T16	
台 座	*×*×*		台 座	*×*×T1.5	*未計測
髪の様式	巻毛・毛筋垂下型		髪の様式	巻毛・毛筋垂下型	
尾の形状	蓮華花弁型		尾の形状	蓮華花弁型	
年代推定	17世紀半～18世紀		年代推定	17世紀半～18世紀	

狛 犬 B

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H38×W26×T15		吽 形	H37×W25×T14	
台 座	L22×W13×T2		台 座	L23×W12×T2	
髪の様式	自由型		髪の様式	自由型	
尾の様式	三井分類にない		尾の様式	三井分類にない	
年代推定	19世紀半		年代推定	19世紀半	

表2d. 越前狛犬等の集計表(4).

(H:高さ, W:横幅, T:厚さ. 台座L:長さ, W:幅, T:厚さ. \*:欠測)

8) 福島町 恵比須神社の「越前狛犬」

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H34.5×w*×T16.5		吽 形	H34.5×T未計測×W17	
台 座	L25×W14.5×T3		台 座	L25×W14×T3	
髪の様式	多段房型		髪の様式	多段房型	
尾の形状	3条その他型A		尾の形状	3条その他型A	
股 間	性器状の突起あり		股 間	性器状の突起なし	
年代推定	16世紀～17世紀		年代推定	16世紀～17世紀	

9) 福島町 八幡神社の「越前狛犬」

阿 形			吽 形		
項 目	計測値等	備 考	項 目	計測値等	備 考
阿 形	H42×W35×T15		吽 形	H41×W35×T16	
台 座	L40×W22×T4	補 修	台 座	L40×W29×T4	補 修
髪の様式	毛筋垂下型		髪の様式	毛筋垂下型	
尾の様式	3条先端内巻型B		尾の様式	3条先端内巻型B	
頭頂部	角あり(3cm×6cm)		頭頂部	角あり(2.5cm×5cm)	
年代推定	16世紀～17世紀初		年代推定	16世紀～17世紀初	



1. 阿形正面



2. 阿形側面



3. 阿形背面・尾



4. 吽形正面



5. 吽形側面



6. 吽形背面・尾

写真1. 石狩市 浜益神社の越前狛犬.



1. 阿形吽形正面



2. 阿形吽形側面

写真2a. 石狩市 石狩弁天社の越前狛犬(1).



3. 阿形正面



4. 阿形側面



5. 阿形背面・尾



6. 吽形正面



7. 吽形側面



8. 吽形背面・尾



9. 阿形底面 右前側



10. 墨による瞳の描き入れ



11. 墨書 阿形吽形とも右から「庄内酒田柏屋」

写真2b. 石狩市 石狩弁天社の越前狛犬(2).



1. 阿形側面 尾と耳



2. 阿形背面 髪が背中まで



3. 阿形背面 尾



4. 吽形側面



5. 吽形背面 尾

写真3. 泊村 泊稻荷神社の笏谷石製狛犬.



1. 阿形正面



2. 阿形側面



3. 阿形背面



4. 阿形 尾部



5. 吽形正面



6. 吽形側面

写真4. 寿都町 稲荷神社の笏谷石製狛犬.



1. 阿形側面



2. 阿形髪型



3. 阿形背面  
小型狛犬背面



4. 阿形尾部



5. 阿形側小型狛犬



6. 阿形側面



7. 阿形側面小型狛犬背面



8. 阿形側小型狛犬側面

写真5. 島牧村 巖島神社の越前狛犬・小型狛犬.



1. 右像正面



2. 右像側面



3. 右像背面



4. 右像台座底面 左臀部



5. 左像(阿形?)  
正面



6. 左像側面



7. 左像背面

写真6. 乙部町 八幡神社の小型狛犬.



1. 狛犬A狛犬B正面



2. 狛犬A阿形吡形正面



3. 狛犬A側面



4. 狛犬A背面



5. 狛犬A吡形前足刻字越前



6. 狛犬B正面



7. 狛犬B側面



8. 狛犬B背面



9. 狛犬B 左側面施毛



10. 狛犬B阿形尾

写真7. 上ノ国町 上ノ國八幡宮の越前狛犬.



1. 阿形右側面



2. 阿形左側面



3. 阿形背面と尾



4. 阿形性器？



5. 吽形正面



6. 吽形側面と髪型



7. 吽形背面と尾

写真8. 福島町 恵比須神社の越前狛犬.



1. 阿形側面



2. 阿形背面と尾



3. 阿形尾側面



4. 阿形頭部 角



5. 吽形側面



6. 吽形背面・尾



7. 吽形頭部 角

写真9. 福島町 八幡神社の越前狛犬.



# 石狩湾東部沿岸におけるウミガメ類ストランディングの記録

Stranding records of sea turtles

along the eastern coast of Ishikari Bay, Hokkaido, Japan

志賀 健司\*

Kenji SHIGA\*

## 要 旨

石狩湾東部沿岸における継続的な漂着物調査の結果、2005年以降の15年間でウミガメ類のストランディング記録（死亡漂着）が3件確認された。その内訳は、アオウミガメ1件、アカウミガメ1件、タイマイと思われる個体1件である。

**キーワード：**ウミガメ、漂着、混獲、日本海、対馬暖流

## ウミガメのストランディング

ウミガメは爬虫綱カメ目ウミガメ科およびオサガメ科の海生動物の総称で、日本近海ではアオウミガメ *Chelonia mydas*、アカウミガメ *Caretta caretta*、ヒメウミガメ *Lepidochelys olivacea*、タイマイ *Eretmochelys imbricata*、オサガメ *Dermochelys coriacea* の5種が生息している。いずれも熱帯～温帯の主に外洋域に分布し、メスの産卵時以外は海中で生活する（高田・大谷, 2011；亀崎, 2012）。5種とも「種の保存法」の対象に指定されており（環境省・日本ウミガメ協議会, 2006）、IUCNレッドリストでは絶滅危惧IA（CR）～IB（EN）に区分されている（IUCN, 2020）。環境省レッドデータブックでは、アオウミガメ、アカウミガメ、タイマイの3種が絶滅危惧IB類（EN）～II類（VU）に区分されている（環境省, 2019）。

ウミガメは通常は北海道周辺海域では見られないが、稀にストランディング（漂着・混獲）事例があり、例えば1997年～2000年の間には太平洋沿岸と日本海沿岸とで21件の事例（半数強はアカウミガメ）が記録されている（小林・亀崎,

2008）。また、2012年・2013年にはオホーツク海側でも2例のアカウミガメのストランディングが確認されている（臼井ほか, 2014）。日本海側の石狩湾沿岸では、著者が漂着物調査を開始した2005年以降、アオウミガメ、アカウミガメ、タイマイもしくは交雑種の漂着記録がある（志賀・伊藤, 2008；志賀, 2015）。また、同じ石狩湾沿岸の小樽市では1995～1996年頃に蘭島でアカウミガメが漂着し、骨格標本が小樽市総合博物館に収蔵されている。ウミガメの分布域から、これらの漂着個体は暖流によって温帯以南の海域からもたらされたものであり、北海道以南を起源とする暖流系漂着物と見なすことができるため、海水温や海流など、海洋環境の変動がその背景に潜んでいる可能性がある。将来的にそれらの検討材料となるよう、これまでに著者が発見・採集、あるいは情報提供を受けた、石狩湾東部沿岸のウミガメ類ストランディング事例の詳細をまとめて報告する。

## 石狩湾東部沿岸でのストランディング （漂着・混獲等）の記録

石狩浜および周辺海岸（図1）における継続的

\* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

表1. 石狩湾東部沿岸で確認されたウミガメ類ストランディング

発見日	種名	発見地	直甲長 (cm)	状態	備考
2007.12.06	アカウミガメ	石狩浜 (石狩市)	21	新鮮 (→流出)	
2014.03.24	アオウミガメ	無煙浜 (石狩市)	約40	甲のみ (→消失)	直甲長は写真より推測
2014.05.06	タイマイ	石狩浜 (石狩市)	31	ミイラ状	交雑種の可能性もある

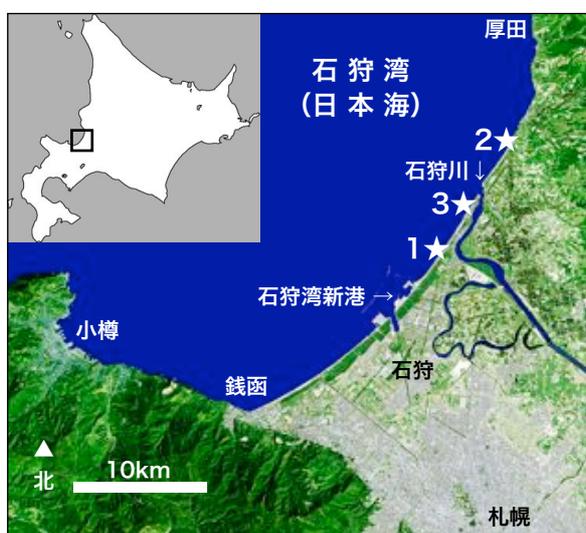


図1. 調査地域。☆は発見場所。1：2007年アカウミガメ，2：2014年アオウミガメ，3：2014年タイマイ。

な踏査による漂着物調査，調査協力者からの情報収集などから，2005年以降，石狩湾東部沿岸では3件のウミガメ類ストランディングが確認された（表1）。いずれも死亡漂着で，死体に放流標識等は見られなかった。

#### 2007年12月6日：アカウミガメ（図2）

石狩湾新港の東方の石狩浜を踏査中に死亡漂着を発見した（志賀・伊藤，2008）。当日の朝9時の海水温は3.7℃，海からの風が極めて強く，砂浜には大量のアマモ類の漂着が見られた。ウミガメ

は腐敗や食害がまったくない新鮮な状態で，漂着直後であることを窺わせた。頭部が大きく，背甲は前方ほど幅が広いハート形で肋甲板が5対あることなどから，アカウミガメと同定できた。直甲長21cmと小さいことから，若年個体と思われた。発見した死体は一時的に砂中に埋設保管したが，後日，波浪により流出したことが確認された。

#### 2014年3月24日：アオウミガメ（図3）

石狩市厚田区無煙浜での漂着発見の情報と画像提供を受けた（ビーチコーミング愛好家からの私信）。背甲および腹甲のみで軟体部は完全に欠損しており，漂着後，数日から数週間単位の時間が経過していたものと思われる。背甲全体が滑らかで卵形，肋甲板が4対であることからアオウミガメと同定できた。直甲長およそ40cmで，比較的若い個体と推測された。情報を受けてすぐに現地確認に向かったが，死体はすでに消失していた。汀線から十分に離れた内陸側にあり，高波の痕跡もなかったことから，人為的に持ち去られた可能性がある。

#### 2014年5月6日：タイマイ（図4）

志賀（2015）の報告にあるもので，石狩川河口左岸側の石狩浜で死亡漂着が発見され，標本がいしかり砂丘の風資料館に持ち込まれた。軟体部の欠損はないが，全身は乾燥したミイラ状であつ



図2. アカウミガメ (直甲長21cm, 2007年12月6日, 石狩浜).



図3. アオウミガメ (直甲長約40cm, 2014年3月24日, 石狩市無煙浜, 撮影: 工藤友紀さん).



図4. タイマイ (直甲長31cm, 2014年5月6日, 石狩浜, 撮影: 石橋孝夫さん).

た. 甲の縁辺部が鋸歯状, 肋甲板が4対, 前額板が2対あることなどからタイマイと推測されたが, その他の形質から, タイマイと他のウミガメ類との交雑種の可能性もある. 直甲長は31cmと小さく, 若年個体と考えられる.

#### 海岸漂着物に見られる切断痕

石狩浜ではこれらウミガメ本体のストランディングのほか, ウミガメの食痕と考えられる切断痕が刻まれた漂着物が, しばしば発見されている (図5). 軟質のプラスチック類に菱形もしくはV字形に1~2cmほど切り取られたような痕が見つかることがあるが, これはturtle biteと呼ばれ, ウミガメが誤食したときに噛み切られた痕跡と考えられている (Williams and Sullivan, 2005). 漂着プラスチックの中でも韓国製や台湾製など,

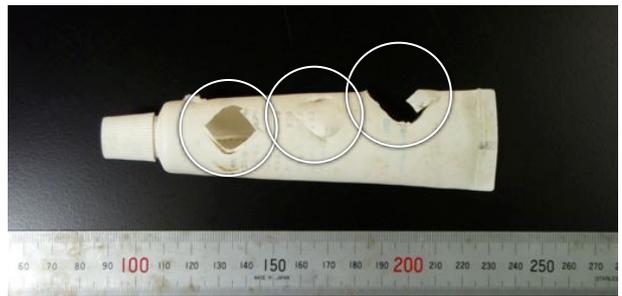


図5. 石狩浜で採集された漂着プラスチック (韓国製) に見られるturtle bite (○印).



図6. 石狩浜で採集された漂着コウイカ殻に見られるturtle bite (目立つ痕のみに○印).

対馬暖流起源と考えられるものに特に多く見られる。また、主に熱帯～温帯海域に分布する頭足類コウイカの殻が石狩浜に漂着することがあるが、それらにも同様の痕跡が見られることが多い（図6）。2016年の漂着物調査では、石狩浜周辺で採集された漂着コウイカ殻192個中54個にV字形の傷が確認されている（志賀, 2017; 2018）。

#### 漁網への混獲

これら近年の漂着関連の事例に対して、石狩湾沿岸でも過去に稀ではあるが漁網への混獲事例も知られている。その一例として、いしかり砂丘の風資料館に収蔵されているウミガメ甲がある。これは石狩市厚田区（当時は厚田村）で混獲され、背甲に漁業者と思われる名前・屋号を刻んで放流された後、別の海岸に死亡漂着したとされる標本である。直甲長59cmで、形態からアカウミガメと同定できるが、時代など詳細は不明である。このような混獲事例も貴重な情報であり、今後の調査が必要である。

このようなウミガメ類のストランディング事例や痕跡は、暖流系生物の北上を示す貴重な記録であり、日本列島周辺の海面水温や対馬暖流の勢力の変動を反映していると考えられる。現段階ではまだまだ情報量は少ないが、今後も長期間に渡って調査を継続してデータを蓄積していくことが必要である。また、自然漂着事例に加えて漁網への混獲事例の情報も収集していくことによって、将来的に海洋環境の変遷や海洋生態系の解明に寄与するデータとなっていくことが期待できる。

**謝辞：**札幌市の工藤友紀さん、いしかり砂丘の風資料館学芸協力員の石橋孝夫さん、北海道大学総合博物館教授の大原昌宏さん、小樽市総合博物館学芸員の山本亜生さんからは、漂着情報や採集標本を提供していただいた。札幌市の徳田龍弘さん、日本ウミガメ協議会の平井紗綾さんには同定に際してご指導いただいた。皆様に感謝いたします。

#### 引用文献

- IUCN, 2020. The IUCN Red List of threatened species, ver. 2019-3. <https://www.iucnredlist.org/> (2019年12月閲覧)
- 亀崎直樹 編, 2012. ウミガメの自然誌／産卵と回遊の生物学. 東京大学出版会.
- 環境省・日本ウミガメ協議会, 2006. ウミガメ保護ハンドブック. 環境省・日本ウミガメ協議会.
- 環境省, 2019. 環境省レッドリスト2019. 環境省. <https://www.env.go.jp/press/files/jp/110615.pdf> (2019年12月閲覧)
- 小林万里・亀崎直樹, 2008. 北海道沿岸におけるウミガメの記録. うみがめニューズレター, 77: 10-13.
- 志賀健司・伊藤静孝, 2008. 2007年に北海道石狩湾沿岸で見られた暖流系漂着物. 漂着物学会誌, 6: 11-16.
- 志賀健司, 2015. 2014年に石狩浜で発見されたタイマイと思われる個体の漂着. 北海道爬虫両棲類研究報告, 3: 21-23.
- 志賀健司, 2017. 2016年の北海道石狩湾沿岸におけるコウイカ殻の漂着. いしかり砂丘の風資料館紀要, 7: 1-6.
- 志賀健司, 2018. 石狩浜のコウイカ大量漂着と殻に見られる食痕. 北海道自然史研究会2017年度大会講演要旨, 10.
- 高田榮一・大谷勉, 2011. 原色爬虫類・両生類検索図鑑. 北隆館.
- 白井平・渡辺紗綾・野村卓之, 2014. オホーツク海沿岸の枝幸沖で捕獲された枝幸町初記録のアカウミガメについて. 枝幸研究, 5: 29-31.
- Williams, J. and Sullivan, G., 2005. Wracky Potpourri. *The Drifting Seed*, 11(3): 13-15.

Stranding records of sea turtles along the eastern coast of Ishikari Bay, Hokkaido, Japan

Kenji SHIGA

**Abstract**

Continuous survey of beach drifts revealed three cases of sea turtle strandings (dead stranding) along the eastern coast of Ishikari Bay for 15 years since 2005. The breakdown is one green turtle, one loggerhead turtle, and one individual appeared to be hawksbill turtle.

**Key words:** sea turtle, drift ashore, bycatch, Japan Sea, Tsushima Warm Current



# 新たに見つかった石狩川の2種の鮭漁具について

Two kinds of newly discovered tools for salmon fishing  
used in the Ishikari River

荒山 千恵\*1・石橋 孝夫\*2

Chie ARAYAMA\*1 and Takao ISHIBASHI\*2

## 要 旨

新たに発見された2種の鮭漁具とは「魚叩き棒」と「鉄製鉋先」（離頭鉋）である。これまで知られてきたサケ漁に用いる「魚叩き棒」の形態はいずれも棒状ないしは横槌状で、今回確認された縦槌状のものは知られていない。また、「鉄製鉋先」についても、アイヌ民族が従来用いてきた「キテ」とは異なるもので、離頭鉋をサケ漁に用いた例はほとんど知られていない。同類の鉋先については本州の太平洋側で行われるカジキ漁などに見られ、これが明治期に北海道へ伝わったことでアイヌ民族が入手し、石狩川のサケ漁で使用された可能性がある。

**キーワード：**サケ漁，魚叩き棒，縦槌，離頭鉋，鉄製鉋先

## 1. はじめに

本稿では、かつて石狩川でのサケ漁に使用されていたと伝えられる2種4点の漁具について取り上げる。一つは「木製の槌」（2点），もう一つは「鉄製の鉋先」（2点）である（写真1～4，

図1，図2，表1，表2）。これらは、旧収蔵者がサケ漁場に働きに来ていたアイヌの漁夫から貰ったもので、「木製の槌」は捕獲したサケを叩くための「魚打棒」に、「鉄製の鉋先」はサケを突いて捕獲するために使用されたものという。これまで、この種の道具が石狩川のサケ漁で使用さ

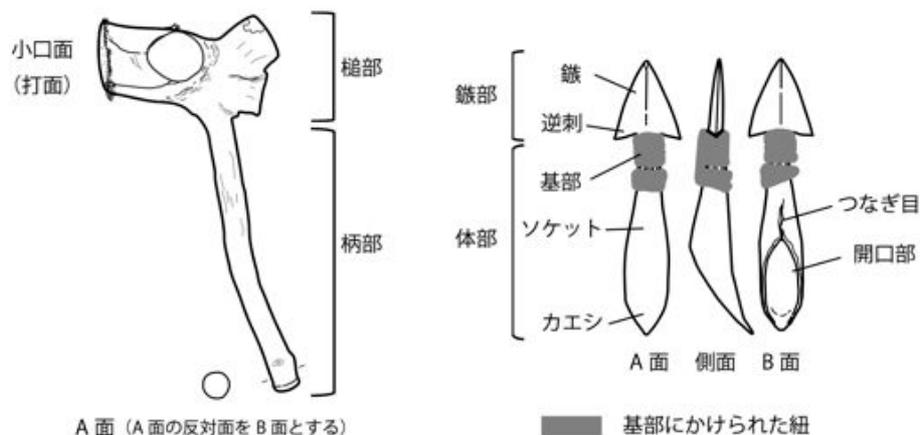


図1. 各資料の部位名称.

\*1 石狩市教育委員会生涯学習部文化財課（併任，学芸員） 〒061-3292 北海道石狩市花川北6条1丁目30-2

\*2 いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

れたことは知られていない。そこで、これらの資料の性格を明らかにするため、聞き取りや博物館等に収蔵されている類似資料の調査を実施した。資料調査は荒山・石橋の共同で、聞き取りは石橋がおこなった。以下、その調査報告について記す。

## 2. 調査の経緯

調査の経緯は、2019年5月に著者の1人である石橋が弁天歴史公園運上屋棟（石狩市弁天町）の展示品の中に、先に述べたサケ用とされる漁具2種3点を目にしたことに始まる。この展示品は「いしかりガイドボランティアの会」によるもので、展示ラベルには「魚打棒」と「銚（マレク）」と記載され、いずれも石狩市内の今井光男氏からの寄贈であることが表示されていた。

「魚打棒」はサケ漁の際に暴れるサケを叩くための道具で、「魚叩き棒」「鮭叩き棒」などとも称される道具である。従来知られてきたのは棒状

のタイプ（横槌状）（写真5）であるが、展示品2点はいずれもT字型の縦槌状であった。また、「銚（マレク）」とされる展示品1点はアイヌ民族の鮭漁具「マレク」（鉄製の鈎銚）ではなく、鉄製の銚先（離頭銚）であった。この2種の道具がサケ漁に用いられたということは聞いたことがなく、石橋にとっては初見の資料であった。そのため、詳しい内容を知るため、資料管理をしている「いしかりガイドボランティアの会」から資料を借用し、旧収蔵者からの聞き取り・実測・写真撮影等の調査をおこなった。また、聞き取り調査の過程で鉄製の銚先はさらにもう1点あり、旧収蔵者から石狩市本町にある石狩尚古社資料館（中島勝久氏主宰）に寄贈されていることがわかり、同氏の了解を得て同時に調査を実施することになった。さらに、銚先については、道内博物館等に照会のうえ同種の資料調査もおこなった。今回の調査では、苫小牧市美術博物館、北海道博物館で同種の銚先を収蔵していることが確認でき、計6点を実見した（図4、表4）。また、北海道大学北

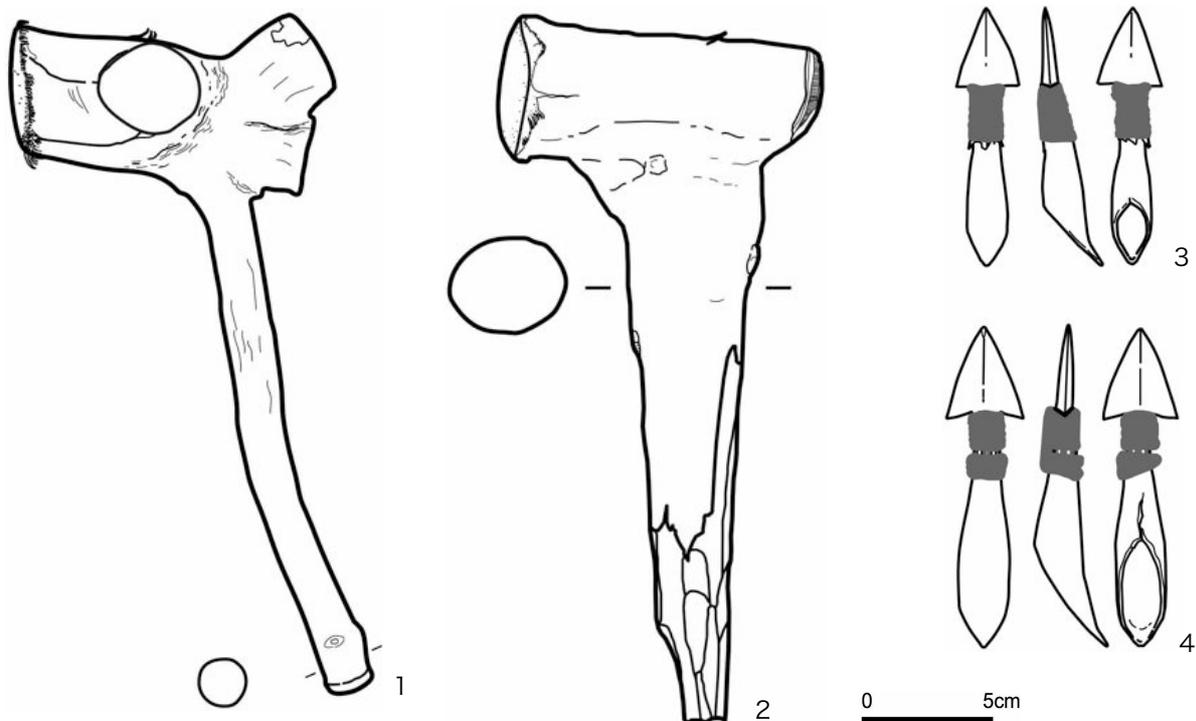


図2. 漁具.

1：魚打棒1， 2：魚打棒2， 3：鉄製銚先1， 4：鉄製銚先2。スケールバーは共通。

（1～3：いしかりガイドボランティアの会収蔵・今井氏旧収蔵， 4：石狩尚古社資料館収蔵・今井氏旧収蔵）

方生物圏フィールド科学センター植物園にも3点の収蔵があり、いずれも本州で採取されたもので、提供いただいた資料情報をもとに後述に触れることとする。

なお、本稿に記す資料の部位名称は図1に示すとおりである。

### 3. 聞き取り調査

資料の来歴について、旧収蔵者の今井光男氏から石橋が聞き取りをおこなった。その結果、寄贈された2種の漁具について次のようなことが明らかとなった。

- ① 2種の漁具は明治半ばから石狩川左岸の志美でサケ曳網漁場をもっていた今井家に伝わったものである。(注1)
- ② 2種の漁具は今井家で使っていたのではなく、この漁場に働きにきていた対岸に住む生振アイヌの人からもらったものである。
- ③ 2種の漁具の使用法は「鮭の頭部を叩く槌」と「岸に寄った鮭を突くための銚」であり、石狩川で使用された。
- ④ 今井氏自身はこれら2種の漁具が実際に使用されたのは見たことはなく、使用法などは親やアイヌの人から聞いた。銚の復元(柄、繋ぎの長い紐)は今井氏がおこなった。
- ⑤ 鉄製の銚はもう1点あり、石狩尚古社資料館(中島勝久氏)に寄贈した。

⑥ 石狩川のサケ漁の叩き棒について、刺し網・流し網漁で乗組員が2人の舟の場合、親方が40cmほどの長い叩き棒を使い、手伝いはそれより短く、30cmほどのものを使うように決まっていた。サケ漁の舟には乗組みの数の叩き棒が備えられていた。

## 4. 「魚打棒」

### 4-1. 資料紹介

まずは、サケを叩いたとされる2点の木製品について記載する。資料の展示名称は「魚打棒」となっており、使用目的も「鮭の頭部を叩く槌」ということから、以下「魚打棒」とする。本来、形態的には槌型をしているので「魚打槌」とでもいうべきであろう。この棒を使っていた生振のアイヌの人がこれをアイヌ語で何と呼んでいたか、本来の名称は不明である。

#### 4-1-1. 「魚打棒1」(運上屋棟展示品・いしかりガイドボランティアの会収蔵)

大きさは、全長26.7cm、柄部の長さ19.5cm、槌部の直径5.0~5.5cmである(図2-1、写真1、表1)。幹と枝の叉木を利用して、幹の部分を槌部になっている。槌部にした幹の部分には太い枝が3本あり、切断面から鋸で除去されたものと推測される。柄部は細く、槌部と柄部の角度は斜めである。樹種は未同定であるが樹皮はカエデに似て

表1. 魚打棒一覧.

資料	図番	収蔵	全長 (cm)	槌部(横方向) の長さ(cm)	小口〈大〉の 径(cm)※打面	小口〈小〉の径(cm)	柄部(cm)
魚打棒1	図2-1 写真1	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	26.7	12.5	5.5×5.0	上方の切断面：径3.3 下方の切断面：径3.0 側面の切断面：径3.5×4.0	長さ：19.5 幅：1.8
魚打棒2	図2-2 写真2	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	27.5	12.3	5.5	3.5	長さ：21.8 最大幅：5.5 先端幅：2.4×1.8

いる。少なくともヤナギではない。幹の太い方の小口面（打面）全体に叩いた使用痕が認められる。打面の外周の半分ほどの部分、特に下方部に顕著な潰れが認められる。この部分が主要な作業面と考えられる。槌部のもう一方の小口面は2本の枝木に分岐しており、いずれの断面にも切断痕が残り顕著な潰れは観察されない。また、柄部には摩滅による光沢が認められる。「魚打棒2」ほどでないが、長期間の使用されたことにより摩滅したと考えられる。

#### 4-1-2. 「魚打棒2」（運上屋棟展示品・いしかりガイドボランティアの会収蔵）

大きさは、全長26.5cm、柄部の長さ21.8cm、槌部の直径5.5cm程である（図2-2、写真2、表1）。幹と枝がほぼ直角になった叉木の部分を用い、枝の部分を柄部に、幹の部分を槌部に木取りしている。幹の小口面は平坦で、その状態から切断には鋸を使用したとみられる。外面には樹皮が残るが、柄部の下方は縦方向に削って調整している。削り幅は1cm程である。樹種は未同定であるが、表皮の状態から「魚打棒1」とは異なる樹種と考えられる。少なくともヤナギではない。槌部では、幹の太い方の小口面（打面）全体に叩いた使用痕が認められる。打面の外周の半分ほどの部分、特に下方部に顕著な潰れが認められる。この部分が主要な作業面と考えられる。槌部のもう一方の小口面は切断痕が残り、顕著な潰れは観察されない。また、柄部の半ばで樹皮の残っている部分に摩滅による顕著な光沢がある。長期間の使用されたことにより握り部分も摩滅したと考えられる。

以上のように、この2点の「魚打棒」は形状および使用痕からみて、叩いて使用した道具であることは明らかである。枝木の特性を活かして槌にかなった部位を木取りし、加工を加えて仕上げた自作品とみられる。用途について聞き取りからは、捕獲した「サケを叩く」ために用いられたことがわかり、観察した2点の槌部の打面の使用痕

がいずれも下方面に顕著であることは、特定の使用方法のもとに使われ続けられたためと考えられる。年代については、今井家が石狩川でサケ漁に従事した明治20年代以降、もしくは、それ以前からこの漁場にはアイヌの人々が働きに来ていた可能性があり、使用時期はそれ以前に遡ることも考えられる。

#### 4-2. 石狩川のサケ漁と「魚叩き棒」

魚叩き棒については、アイヌ民族の「イサパキニ」という棒状の漁具が知られている。この棒でサケの頭部を叩き絶命させるが、同時にサケの霊を送る意味があるとされる。樹種はヤナギ・ミズキにほぼ限られ、どの木でもよいわけでないといわれている（知里, 1959）。今井氏からの聞き取りによると、第二次世界大戦後の石狩川でのサケ漁では「棒状の魚叩き棒」が使用されていたというが、残念ながら実物資料は収集されていない。石狩川での「棒状の魚叩き棒」の使用については、このほかに次のような聞き取りや資料が確認されている。

##### 【聞き取り事例（70歳代）】

子どもの頃の石狩川右岸（石狩市八幡町地区）の記憶：「確かに石狩川河口右岸のサケ漁場で、水揚げの際、サケを盛んに叩いていたのを見たことがある。棒の形状については、漂着したもの（後述する2018年に石橋が漂着物として採取した魚叩き棒）よりも、さらに太かったような気がする。樹種はアオダモで棒が漁場の壁にずらりと掛けられていた。棒用のアオダモを川岸に植えていた。」（石橋, 2018, 引用内の括弧書きは本稿による補足。）

##### 【絵葉書に残された写真】

昭和初期とみられる絵葉書には河口の曳網で棒状の魚叩き棒をもったと思われる漁夫の姿が写っているものがある（写真6）（田中, 2002）。

##### 【漂着物】

2018年、石橋は石狩川河口左岸で棒状の魚

叩き棒とみられる漂着物を採取したことがある。年代は不明だが、使用時期は近世末から昭和30年代までの間と考えられる。この樹種はヤナギ属であった。(石橋, 2018)

#### 4-3. 小括

石狩川での棒状の「魚叩き棒」の例を紹介したが、今のところ槌状の叩き棒についての記録は確認されていない。また、アイヌ民族のサケ漁で縦槌状の魚叩き棒を使用したという民族誌による記録も知られていない。

T字形の木槌の類例に関しては、石狩低地帯の遺跡から出土した縦槌について集成検討されている(荒山, 2011)。幹と枝の叉木の部分で木取りした木槌については、擦文文化期およびアイヌ文化期に属する41点が確認され、今回紹介した「魚打棒」とされる木槌と類似するものがみられる。その一例に、札幌市K39遺跡恵迪寮地点(サクシュコトニ川遺跡)出土の縦槌がある(写真7)

(北海道大学埋蔵文化財調査室, 1986)。全長30.2cm, 樹種はイチイ, 擦文文化期とされる。大きさ, 形態的特徴, 木取り, 使用痕の状態など各所に類似が認められる。特に、小口面の側縁下方寄りが摩滅している点は、先に紹介した2点の「魚打棒」(木槌)の使用痕の状態に類似しており、用途・使用法を考えていくうえで注目される。出土した縦槌から用途を特定することは容易ではないが、「魚打棒」として用いた可能性についてこれまであまり考えられてこなかった。考古資料と民具資料の両者を対象とした縦槌の機能用

途について、今後さらに検討が必要である。

## 5. 鉄製銚先

### 5-1. 資料紹介

#### 5-1-1. 銚先の分類

次に、サケを突くために使用したとされる鉄製銚先について記載する。ここでいう銚先とは離頭銚のことである。北海道では、縄文文化早期以来、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化の各期を通じて骨角製の銚先が用いられてきた。また、アイヌ民族の離頭銚では、骨角製の体部に鉄や銅の鏃をつけた「キテ」が知られている(図3, 写真8)(北海道開拓記念館, 1981; 2003)。「キテ」は、古くから北海道南西部ではクジラ・マンボウ・メカジキ, それ以北では海獣狩猟(アザラシなど)に用いられてきたという(名取, 1945)。

今井氏旧収蔵の鉄製銚先2点は、大きさは異なるが全く同タイプで、全体が鉄製の銚先である。三角形の鏃部, 体部には柄を装着するための穴(ソケット)があり, その外面(図1-2に示すA面)にノの字状に外反するカエシがある(注2)。これらの特徴から、柄と銚先が分離する離頭銚の銚先である。この銚先は、写真8に示した「キテ」として知られている骨角製の体部で先端に金属性の鏃をつけたタイプの銚先とは、かなり異なっている。

ここで、「鉄製銚先1・2」, および後述に取り上げる類例との特徴を比較するために、鏃部お

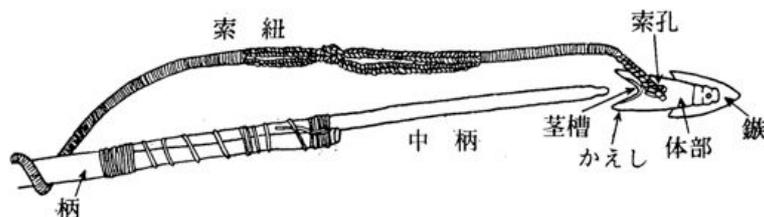


図3. 離頭銚「キテ」の構造と部分名称 (大塚, 1977: 780)。

よび体部の次に挙げる3つの属性、「①鍬（逆刺）」「②基部・ソケット」「③開口部・カエシ」に着目し、本稿で用いる分類方法を設定する。

【鍬部】（注3）

①鍬（逆刺）

1a) 逆刺の切込みが非常に浅いもの（鍬部の切込率=切込みの深さ/鍬長=1/10未満）

1b) 逆刺の切込みの深さが鍬長の中央まで達しないもの（鍬部の切込率=切込みの深さ/鍬長=1/10以上~1/2未満）

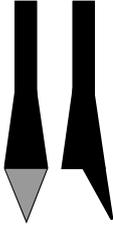
1c) 逆刺の切込みの深さが鍬長の中央まで達するもの（鍬部の切込率=切込みの深さ/鍬長=1/2以上）

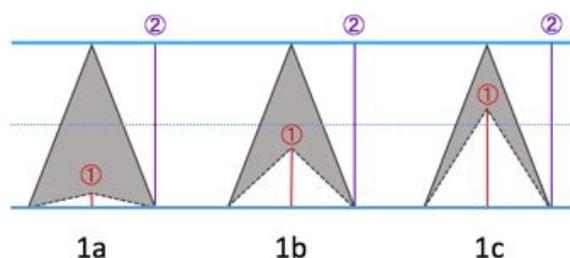
【体部】

②基部・ソケット

2a) 基部とソケットの境目が明瞭に分かれない

表3. 本稿で取り上げる金属製銚先の分類

分類	該当資料	鍬部【※1】 (逆刺の切込率)			基部・ソケット		開口部・カエシ		
		1a	1b	1c	2a	2b	3a	3b	
大別	細分	該当資料 (図番)							
A類	A1類	鉄製銚先1 (図2-1) 鉄製銚先2 (図2-2)	○			○		○	
	B1類	類例10 (写真12-左)		○		○		○	
	B2類	類例3 (図4-3)		○		○		○	
B類	B3類	類例1 (図4-1)		○		○		○	
	B4類	類例2 (図4-2) 類例7 (写真7-1) 類例11 (写真12-右)		○		○		○	
	C1類	類例4 (図4-4)			○	○		○	
C類	C2類	類例5 (図4-5) 類例6 (図4-6) 類例8 (写真7-2) 類例9 (写真7-3)			○	○		○	



【※1】 鍬部（逆刺の切込率）の細分類

- ①：逆刺内側の切込みの深さ
- ②：鍬部の長さ（鍬長）

もの、もしくは、基部からソケットにかけて徐々に裾を広げるもの

2b) 基部とソケットの境目が明瞭に分かれるもの

③開口部・カエシ

3a) 開口部とカエシが一体化し、開口部側面が斜状のもの

3b) 開口部が直線的でB面にカエシが付き、開口部とカエシの側面形態が明瞭に分かれるもの

これらの属性①～③の組合せからは全12通りのタイプが想定されるが、本稿に取り上げる銚先（全体が金属製で作られるもの）に該当するものとして、A1類：1a-2a-3a, B1類：1b-2a-3a, B2類：1b-2a-3b, B3類：1b-2b-3a, B4類：1b-2b-3b, C1類：1c-2a-3b, C2類：1c-2b-3bの7類に分類する（表3）。

5-1-2. 「鉄製銚先1」（運上屋棟展示・いしかりガイドボランティアの会収蔵）（図2-3, 表2, 写真3）

大きさは、全長は9.9cm, 鍬の長さ3.0cm, 鍬の幅1.9cm, ソケットの開口部幅1.6cm, 重さは44gである。鉄製で、鍬・基部・ソケット・単尾のカエシを一体で作る。分類では、A1類（1a-2a-3a）に該当する。鍬の平面形はほぼ二等辺三角形で逆刺の切込みが小さい。また、鍬の中央部に先端から底辺まで鍔のような盛り上がりがある。ソケットA面の末端外側にノの字状に突き

出した単尾のカエシがある。ソケットの深さはカエシの先端から4.8cmである。ソケットのB面には鉄板を丸め合わせたつなぎ目の痕跡が残り、鍛造により作られたと考えられる。おそらく長方形の素材を手作業で叩いて作ったものと推測される。

鍬の下端から柄を装着するためのソケットの膨らみまでの間の基部約2cmにわたり細い撚り紐が巻かれている。植物性の繊維素材による撚り紐4組（各長さ16cm）がそれぞれループするように巻きつけてあり、結束固定されていないため、わずかに動くようになっている。さらに、そのうち3組の紐は途中から1本の太い紐に撚られ、その境目付近で鍬の根元に巻いたもう1組の紐で結んでいる。紐の全長は48cm, このうち太い紐の部分は長さ32cmおよび太さ0.8cmである。鍬の根元に巻いた紐は、他の紐と色合いや材質が異なることから他の3組の紐よりも新しい可能性がある。なお、ループ状に巻いた紐と基部との間には薄い植物の皮（未同定であるが一見してサクラの樹皮のようなもの）を挟んでおり、皮の表面を紐側に向けている。このような別素材を挟む装着方法は鉄と紐との強い摩擦を避けるためではないかと考えらえる。

この資料は、今井氏により上記のオリジナルの紐から、さらに210cmの麻紐、末端に大型動物の犬歯（ヒグマの犬歯か、長さ5.6cm）の根付、ヤナギ製の柄を付けて全体が復元されている。

表2. 鉄製銚先一覧.

資料	図番	収蔵	全長 (cm)	鍬の長さ (cm)	鍬の幅 (cm)	ソケット幅 (cm)	重量 (g)	分類	備考 (cm)
鉄製銚先1	図2-3 写真3	弁天歴史公園運上屋棟展示 いしかりガイドボランティアの会 (今井氏旧収蔵)	9.9	3.0	1.9	1.6	44	A1類 1a-2a-3a	鍬の厚み：0.65 カエシの高さ：2.3 ソケットの深さ： カエシ先端から4.8
鉄製銚先2	図2-4 写真4	石狩尚古社資料館 (今井氏旧収蔵)	12.3	3.4	2.8	1.9	63	A1類 1a-2a-3a	鍬の厚み：0.65 カエシの高さ：3.4 ソケットの深さ： カエシ先端から6.3

5-1-3. 「鉄製銚先2」(石狩尚古社資料館収蔵)  
(図2-4, 表2, 写真4)

大きさは, 全長12.3cm, 鍬の長さ3.4cm, 鍬の幅2.8cm, ソケットの開口部幅1.9cm, 重さは63gである. 鉄製で, 分類では, A1類(1a-2a-3a)に該当する. 「鉄製銚先1」と比較すると, 同タイプであるが, 本資料の方が大型で, 全長が2.4cm, 鍬の長さで0.4cmほど長い. 重量も本例の方が20gほど重い. 鍬の平面形は二等辺三角形に近い. また, 鍬の中央部に先端から底辺まで鑄のような盛り上がりがある. ソケットA面の末端外側にノの字状に突き出した単尾のカエシがある. ソケットの深さはカエシの先端から6.3cmである. ソケットのB面には鉄板を丸め合わせたつなぎ目の痕跡が明瞭に残り, 鍛造により作られたと考えられる.

「鉄製銚先2」にも, 鍬の下端からソケットまでの基部2.5~3.0cmほどの外面に植物性の繊維素材による撚紐4組(各長さ14cm)がループするように巻かれている. さらに, これらの細い撚り紐

を1本の太い紐に撚り合わせている. 紐全体の長さは37cm, このうち太い紐の部分は長さ29cm, 太さ0.6cmである. また, 撚紐が巻かれている部分には, 基部と紐との間に薄い植物の葉ないしは茎のようなものが当てられている. 材質は草本の平行脈が銚先の長軸に並行して観察され, 一見してイネ科の笹の稈を半割にしたようなもので, 表面を紐側に向けたものとみられる. 基部にループした撚紐の巻き方は「鉄製銚先1」と同様である. 「鉄製銚先1」および「鉄製銚先2」は大きさに違いがあるものの, 形態や製作技術の特徴が酷似し, また, 銚先本体のみならず, 紐の巻き方や基部と撚紐の間に別素材を当てて装着することにも共通点が認められる.

5-2. 北海道内博物館等収蔵の金属製銚先

5-2-1. 苫小牧市美術博物館収蔵品(図4-1・4-2・4-3, 表4, 写真9)

苫小牧市美術博物館では類似の金属製銚先が3点(類例1~3)確認された. 銚先はすべてアイ

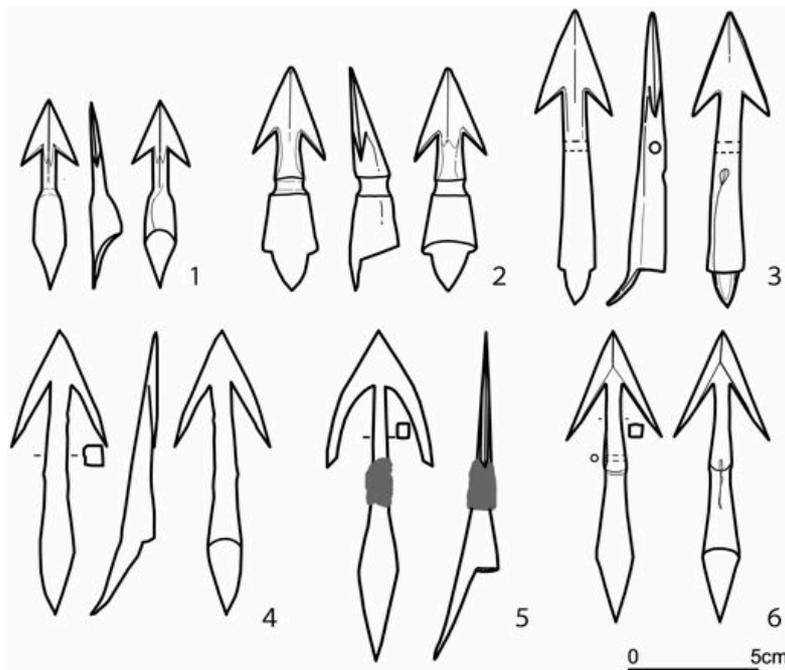


図4. 金属製銚先の類例(1~3は類例1~3, 4~6は類例4~6に対応).  
1~3: 苫小牧市美術博物館収蔵, 4~6: 北海道博物館収蔵.  
(資料調査による実測(1~3)および簡易実測(4~6)より作図)

ヌ民族資料として収蔵されたもので、資料名は「キテ」となっている。同館には、この3点に加え、骨角製や骨角と金属を組合せた銛先を含め「銛(キテ)」は全部で28点あり、採取地域が示されていない3点を除き「苫小牧」と「浦河」とある(苫小牧市博物館, 1988: 14-15)。目録に掲載される計測値から、採取地域の示されていない3点が本稿で類例として取り上げる3点に該当するものと考えられ、具体的な採取地域は不明である。同館のアイヌ民族資料の該当地域については、胆振・日高地方に関するものが多い。そのような性格から、本資料もこの地域に関連したものではないかと予想されるが、明らかにするためには、さらに調査が必要である。

類例3点の分類について、類例1(図4-1)はB3

類(1b-2b-3a)、類例2(図4-2)はB4類(1b-2b-3b)、類例3(図4-3)はB2類(1b-2a-3b)に該当する。大きさやソケットの形状に違いはあるが、鏃部の形態的特徴は共通する。石狩市の銛先2点に比べて鏃の逆刺部分の切込みが深い。一方、後述する北海道博物館収蔵の3点の鏃のように逆刺は細くならない。ソケットの開口部は概して3点とも直線的で、単尾のカエシの長さは短い。カエシの形状には違いがみられ、類例3はノの字状に外反するが、他2点(類例1・2)は外反していない。また、類例2はソケット開口部の開きが大きい。基部からソケットにかけての形状にも違いがある。類例1は基部を細く直線的に作り出し、ソケットから膨らみのある開口部を作り出している。類例2は基部とソ

表4. 金属製銛先の類例一覧.

類例 No.	図番	収蔵【資料番号】	全長 (cm)	鏃の長さ (cm)	鏃の幅 (cm)	ソケット幅 (cm)	重量 (g)	分類	備考(cm)	備考3
類例1	図4-1 写真9	苫小牧市 美術博物館	7.2	2.5	2.0	1.2	10.6	B3類 1b-2b-3a	茎部の幅: 0.6 カエシの高さ: 1.7 ソケットの深さ: カエシの先端から3.7	単尾カエシの形状が外側に 反らずほぼまっすぐ。 裏面のソケット部に、つなぎ 目とみられる痕跡がかす かに残る。
類例2	図4-2 写真9	苫小牧市 美術博物館	8.6	3.6	2.8	2.1	32.8	B4類 1b-2b-3b	基部の幅: 0.9 カエシの高さ: 2.0 中央部に周る溝幅: 0.5 ソケットの深さ: カエシの先端から5.3	単尾カエシの形状が外側に 反らず若干内側を向く。 ソケットの穴は、中央部に 周る溝の奥まで及ぶ。
類例3	図4-3 写真9	苫小牧市 美術博物館	11.4	4.0	3.0	1.4	49.5	B2類 1b-2a-3b	基部: 1.0程 カエシの高さ: 2.2 両側面穿孔: 径0.38~0.45 ソケットの深さ: カエシの先端から5.4	両側面の孔に細い鋼鉄線を 撚り合わせたワイヤーが通 されている。 単尾カエシはノの字形に外 へ反る。 裏面につなぎ目とみられる 痕跡が4cm程残る。
類例4	図4-4 写真10	北海道博物館 【32790】	11.0	4.5	4.0	1.3	—	C1類 1c-2a-3b	基部の幅: 0.7程 カエシの高さ: 2.5	基部断面が方形。 鉄錆の付着あり。
類例5	図4-5 写真10	北海道博物館 【89590】	12.5	5.0	4.0	1.5	35.4	C2類 1c-2b-3b	基部の幅: 0.5程 カエシの高さ: 2.5 ソケットの深さ: カエシの先端から5.5	基部断面が方形。 鏃の逆刺が直線的ではなく 緩やかにカーブする。 基部に紐が付けられている。 使用地域: 幌別
類例6	図4-6 写真10	北海道博物館 【89591】	11.5	4.2	3.7	1.5	32.1	C2類 1c-2b-3b	基部の幅: 0.6程 カエシの高さ: 2.0 基部下方の両側面に 穿孔: 径0.3 ソケットの深さ: カエシの先端から5.0	基部断面が方形。 裏面の中央付近に、つなぎ 目とみられる痕跡が2cm程 残る。 使用地域: 幌別

ケットの間に溝が一周する。類例3は基部両側面を穿孔してワイヤーを通し、基部からソケットにかけて徐々に裾を広げる形状に作られている。

5-2-2. 北海道博物館収蔵の鉄製銚先（図4-4・4-5・4-6, 表4, 写真10）

北海道博物館では3点（類例4～6）の金属製銚先が収集されており、資料調査を実施した。このうち類例4（図4-4, 資料番号：32790, 資料名：突き銚）は採集された銚（詳しい場所は不明）で、目録記載からはアイヌ民族資料であるかどうかわからない（北海道開拓記念館, 1981）。類例5（図4-5, 資料番号：89590, 資料名：銚先）、および類例6（図4-6, 資料番号：89591, 資料名：銚先）は幌別（現登別市）で採集された銚先で、更科源蔵の収集品である（北海道開拓記念館, 1990）。目録の解説には、「2点は、鉄製で、本州の「ツキンボ」に類似する。鍬の付き方、および「かえし」の形は、大塚氏のType-Eに酷似する。使用地は登別幌別となっている。骨製銚のType-Eをまねて鉄で製作したものであろう。」（北海道開拓記念館, 1990：28）とある。大塚のType-Eに該当する銚先は体部が骨角製でソケットのカエシの形態が単尾であることから、カエシの特徴が類似する。一方、鍬部と体部の構造は相違しており（「一体」・「組合せ」）、鍬の逆刺や基部の形態も異なっている。特に類例4～6は鍬部の逆刺は細く、基部は断面が方形で細いなど相違が大きい。

分類では、類例4はC1類（1c-2a-3b）、類例5および類例6はC2類（1c-2b-3b）に該当する。いずれも鍬部の切込みが深く逆刺が細長い。類例5は逆刺のラインが湾曲している。また、これら3点の基部は断面がいずれも方形である。ソケット単尾のカエシは3点いずれも長さがある。類例5は基部に紐を付けている点で「鉄製銚先1・2」に共通するが、紐の装着方法には違いがみられる。類例6は類例3と同様、基部の両側面に貫通する小さな孔が開けられている。ワイヤーは残っていないが同様の目的のラインホールとみられる。

5-3. 類例にかかわる関連資料

5-3-1. 本州の金属製銚先

本州での金属製銚先の類例について確認する。「2. 調査の経緯」に触れたとおり、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園には昭和12年に稲生典太郎が本州で採取した「ミサキ銚」という名称の銚3点の収蔵がある（類例7～9）（写真11）。台帳には「沼津」（静岡県）の資料とある。そこで、同地域の銚について調べていたところ、「沼津歴史民俗史料館だより」に、駿河湾付近では「突ん棒漁」というカジキの銚漁がおこなわれており、離頭銚が使用されていたことが記されている（図5）（神野, 1984；沼津市歴史民俗資料館, 2012a；2012b）。また、沼津より東に位置する南房総市の水産業史には、次のような記載がある。

「突きん棒漁と呼ばれる刺突漁は、江戸時代初期の17世紀当時「当てん棒漁」と呼ばれ、房総半島南域で行われており、江戸時代に手投げモリによる突き取り漁で行われていたクジラ漁の影響を受けて、カジキな

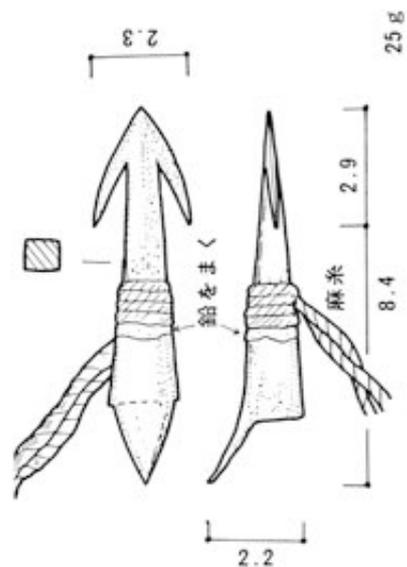


図5. 突ん棒漁の銚（神野, 1984）。

どの大型魚を捕獲する療法として確立した考えられます。(中略)1930年代(昭和5年頃)には、漁船の動力エンジンに改良が加えられ、最盛期を迎えます。漁場は銚子沖や伊豆諸島を中心に三陸沖や北海道沖まで拡大し、漁期も2月から11月頃まで長期化しました。」(南房総市, 2006)。

北海道のどこまで船が来たかは不明であるが、こうした漁集団から銚先が伝えられた可能性が考えられる。

### 5-3-2. 文献にみる北海道の銚先の種類

『日本水産捕採誌』の7巻「特殊漁業」の項目には、北海道で使用された鮭漁具「鮭猪」や鰓膈臍(オットセイ)漁の離頭銚「ハナレ」などが紹

介されている(図6)(農商務省水産局, 1912)。このうち北海道南部の鰓膈臍漁の「一本ハナレ」の銚には、全体が金属製とみられる銚先と、骨角製の体部に金属製の鍬が付けられたとみられる銚先との2種が示されている。前者の銚先は、鍬部と体部を一体に作り出したものとみられ、鉄製銚先に類似するものと考えられる。また、安房国および相模国沿岸で使われる「突漁(ツキンボ)」, 安房国安房郡の外海で用いられる「銚」が紹介されており、これらに描かれている銚先の絵図も、その特徴から同類のものと考えられる。

『日本水産捕採誌』は、明治19(1886)年に農商務省水産局が編纂をはじめ、明治28(1896)年に原稿が完成したものである。デジタルアーカイブを公開している中央水産研究所図書資料館ホー

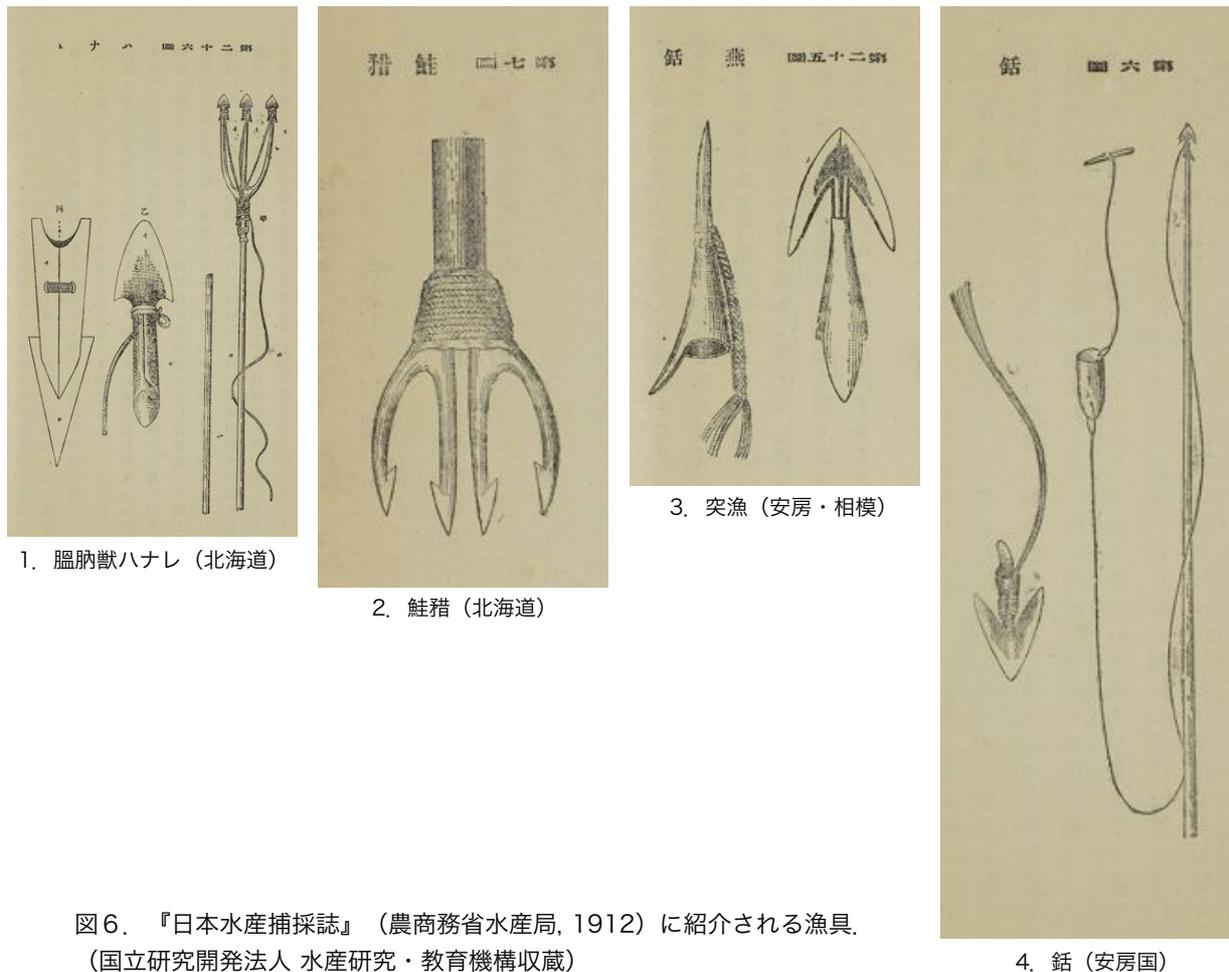


図6. 『日本水産捕採誌』(農商務省水産局, 1912)に紹介される漁具。(国立研究開発法人 水産研究・教育機構収蔵)

ムページには、この書物が編纂当時日本に現存した全国の漁具漁法をまとめ、全国各地の現物調査、古書から当時最新の書物までの幅広い文献調査などをもとにしていることが解説されている(注4)。図6に示した絵図の銚先も、明治前半期もしくはそれ以前から伝わる漁具を示したものと考えられる。

### 5-3-3. 現在販売・使用される金属製の銚

現在、製造・販売される銚先にも類例をみることができ。石橋は、「チョッキリ」という名称で2種の銚先を購入した(類例10・11)(写真12)。

写真12左は、全長9.8cm、銚の長さ3.0cm、ソケット開口部の幅1.2cm、ソケットの深さ3.1cm、重量26.9gである。両側面に貫通する直径0.4cm程の穿孔がある。単尾のカエシはノの字状に外反する。分類では、B1類(1b-2a-3a)に該当する。

写真12右は、全長9.3cm、銚の長さ3.0cm、ソケット開口部の幅1.1cm、ソケットの深さ2.3cm、重量26.9gである。両側面に貫通する直径0.4cm程の穿孔がある。単尾のカエシはノの字状に外反する。分類では、B4類(1b-2b-3b)に該当する。

### 5-4. 小括

今回調査した範囲では、今井氏旧収蔵の鉄製銚先2点は離頭銚の銚先であり、系統的には本州で用いられていた「ツキンボ」や「チョッキリ」と呼ばれる離頭銚の銚先と同類のものを踏襲したものと考えられる。この種の銚先がおおまかには明治初頭前後に北海道に入り、アイヌ民族に伝わった可能性が高い。伝統的に知られている「キテ」とは形状を異にするが、キテに代わる品として使用された可能性がある。

今回の調査をとおして、北海道博物館と苫小牧市美術博物館にも銚先の銚部やソケットなどの形状に多少の差はあるが同様の銚先があることを確

認した。傾向として胆振地方で採取された資料がみられるが、どのように使用されたのか、捕獲対象などについては具体的ではない。本州で用いられるこのタイプの銚はカジキを捕るために使用されており、苫小牧市美術博物館や北海道博物館が収蔵している同類の離頭銚も大型魚種や海獣狩猟が対象になった可能性が考えられる。また、既に述べたように、昭和30年代に南房総市付近の突きん棒漁の範囲が北海道にまで及んだということから、これらの銚は比較的新しい時期のものである可能性もある。

今井氏からの聞き取り調査から得た情報のような、鉄製銚先をサケ漁に用いたというのは今のところ北海道内で知られていない。しかし、文献に当たってみると、幕末の記録に、現在のサハリン島で「ハナレ」をサケ漁に使用したとみられる記述がある。松浦武四郎の「蝦夷山海名産図会 第一」によると、北蝦夷地(樺太)敷香で、「(前略)鱒・鮭・チライ・鮭を追ひ、皆括槍にて突取り」(秋葉, 1997: 280)とある。「括槍」については、同誌に「括槍(ヲツプ)の図」があり、「キテ」と同類の離頭銚の絵図に添えて「松前にてハナレと云」と記されている(秋葉, 1997: 274-275)。この記録から、サハリン島では離頭銚を使ってサケ・マスなどを対象に川漁をすることがあったとみられる。このような例から考えると、北海道でもキテがサケ漁に使用された可能性はある。

## 6. おわりに

以上、石狩市で新たに知られた石狩川周辺で使用されたとみられる鮭漁具2種について述べた。

「魚打棒」は縦槌の形であり、現時点では少なくとも北海道内では類例が知られていない。また「鉄製銚先」については、本州以南の太平洋側でみられる「ツキンボ」などと呼ばれる漁に用いられてきた銚先が、明治期に道南や胆振地方沿岸付近に伝わり、それが石狩まで持ち込まれ、サケの捕獲に使用されたと考えられる。

今回、偶然の機会から新たな資料を知ることができたが、今後も埋もれている民具に注意を向け、当該地域の物質文化について明らかにしていきたい。

**謝辞：**本稿を執筆するにあたり、石狩市の今井光男氏をはじめ、資料を借用しました石狩尚古社資料館主宰中島勝久氏、「いしかりガイドボランティアの会」には大変お世話になりました。石橋による資料旧収蔵者である今井氏からの聞き取り調査にあたっては、いしかり砂丘の風資料館の工藤義衛学芸員に仲介の労をとっていただきました。鉄製銚先2点のX線写真の撮影にあたっては、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターに大変お世話になりました。国立研究開発法人水産研究・教育機構水産研究所、沼津市歴史民俗資料館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園には情報提供をいただき、苫小牧市美術博物館、北海道大学埋蔵文化財調査センター、北海道博物館には資料調査にあたり大変お世話になりました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

注1 ①の漁場に関して、今井家が経営する以前は、かつて石狩役所に勤めアイヌ通辞をしていた玉川啓吉が経営していたという(今井, 2013)。

注2 「鉄製銚先1・2」については、X線撮影により、紐が装着されている基部本体の形状も確認することができた。

注3 本稿では道内に収蔵される類例の集成にとどまるため資料数が少ないこともあり、銚部形態の違いが、(1)銚先の機能・用途(捕獲対象, 漁法)に関係するものなのか、(2)製作技法や帰属時期・地域性に関係するものなのかなど、その要因の検討までは及んではおらず、細分基準は暫定的なものであり、今後も検討が必要である。

注4 水産研究・教育機構図書資料デジタルアーカイブ、『日本水産捕採誌』の解説を参照した(URL: [http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D\\_archives/2013DA021/20103DA021.html](http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D_archives/2013DA021/20103DA021.html))。

## 引用文献

- 秋葉實 [翻刻/編], 1997. 蝦夷山海名産図絵. 松浦武四郎選集 二. 274-280.  
 荒山千恵, 2011. 石狩低地帯から出土した縦樋について. 北海道考古学, 第47輯: 71-86.  
 知里真志保, 1959. アイヌの鮭漁—幌別における調査  
 知里真志保著作集 3: 67-83.

北海道開拓記念館, 1981. 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1, 民族1. 19.

北海道開拓記念館, 1990. 更科源蔵氏資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第22集.

北海道開拓記念館, 2003. 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.

北海道大学埋蔵文化財調査室, 1986. サクシュコトニ川遺跡1・2. 北海道大学.

今井光男, 2013. 石狩市での今井家漁撈回顧. いしかり暦, 26: 24-31.

石橋孝夫, 2018. 石狩浜漂着の魚叩き棒はだれのものか. いしかり砂丘の風資料館紀要, 8: 1-22.

神野善治, 1984. カジキの突ん棒漁. 民具あれこれ 21. 沼津市歴史民俗資料館資料館だより, 10(2): 2.

南房総市, 2006. 市運営観光情報サイト: 南房総いいとこどり. 南房総郷土史, 水産業史; 刺突漁. [https://www.mboso-etoko.jp/kyoudo/suisan/shitotu\\_01.html](https://www.mboso-etoko.jp/kyoudo/suisan/shitotu_01.html)

名取武光, 1945. 銚頭寸話 噴火湾アイヌ捕鯨. 北方文化出版社. 131-133.

農商務省水産局, 1912. 日本水産捕採誌 7. 国立研究開発法人 水産研究・教育機構所蔵.

沼津市歴史民俗資料館, 2012a. 駿河湾の漁. 芹沢松雄さんの漁話 カジキのツキンボ (突きん棒漁) 2. 沼津市歴史民俗資料館だより, 37(1): 3-4.

沼津市歴史民俗資料館, 2012b. 駿河湾の漁. 芹沢松雄さんの漁話 カジキのツキンボ (突きん棒漁) 2. 沼津市歴史民俗資料館だより, 37(2): 3-4.

大塚和義, 1977. アイヌのキテ (回転式離頭銚) の諸系列: 形態分類と編年. 国立民族学博物館研究報告, 1(4): 778-822.

田中實, 2002. 石狩川口に於ける鮭網引きの光景. 札幌維新堂絵ハガキ, 石狩川鮭漁の実景. 石狩漁業組合史. 石狩漁業協同組合. 口絵20.

苫小牧市博物館, 1988. アイヌ民族資料目録. 苫小牧市博物館所蔵目録 2.



1-1. 平面A



1-2. 平面B



1-3. 側面. 槌部の小口面 (大) 打面



1-4. 槌部の小口面 (小)



1-5. 平面Aの槌部. 打面側縁のささくれ

写真1. 魚打棒1.  
(いしかりガイドボランティアの会収蔵  
・今井氏旧収蔵)



2-1. 平面A



2-2. 平面B



2-3. 側面. 槌部の小口面 (大) 側 打面



2-4. 槌部の小口面 (小)



2-5. 槌部の小口面 (大) 打面の磨耗

写真2. 魚打棒2.  
(いしかりガイドボランティアの会収蔵  
・今井氏旧収蔵)



3-1. 鉄製銚先1 (全体)



4-1. 鉄製銚先2 (全体)



3-2. 鉄製銚先1 (紐装着部)



4-2. 鉄製銚先2 (紐装着部)



3-3. 鉄製銚先1 (B面)



4-3. 鉄製銚先2 (B面)



3-4. 鉄製銚先1 (側面)



4-4. 鉄製銚先2 (側面)

写真3. 鉄製銚先1.  
(いしかりガイドボランティアの会收藏  
・今井氏旧收藏)

写真4. 鉄製銚先2.  
(石狩尚古社資料館收藏・今井氏旧收藏)



写真5. 棒状の魚叩き棒. ヤナギ.  
平取町で使用/現代 (いしかり砂丘の風資料館収蔵)



写真6. 昭和初期絵葉書. 円内,  
棒状の魚叩き棒か (田中, 2002) .



写真7. 縦槌. 札幌市K39遺跡恵迪寮地点  
(サクシュコトニ川遺跡) 出土. 擦文文化.  
(北海道大学埋蔵文化財調査センター収蔵)



写真8. キテ. 本体 (体部) は骨製,  
刃 (鍔) は金属製. 1918年以前.  
(北海道博物館収蔵・画像提供)



9-1. 金属製銚先 (A面)  
(左から類例1・2・3)



10-1. 金属製銚先 (A面)  
(左から類例4・類例5・類例6)



9-2. 金属製銚先 (B面)  
(左から類例1・2・3)



10-2. 金属製銚先 (斜後方より撮影)  
(奥から類例4・類例5・類例6)



9-3. 金属製銚先 (側面)  
(手前から類例1・2・3)



10-3. 金属製銚先, 類例6 (側面)

写真9. 金属製銚先, 類例1~3.  
(苫小牧市美術博物館収蔵)

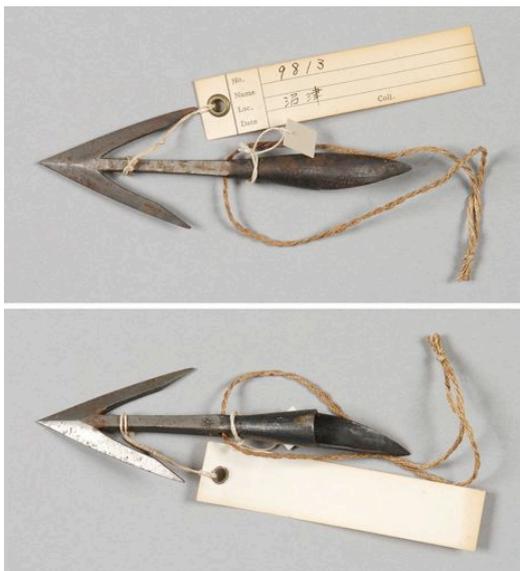
写真10. 金属製銚先, 類例4~6.  
(北海道博物館収蔵)



1. 類例7. No.9811 (長さ4.1cm)



2. 類例8. No.9812 (長さ13.8cm)



3. 類例9. No.0913 (長さ11.8cm)



写真12. 現在も使用されている金属製銚先  
(販売購入品). 左: 類例10. 右: 類例11.

写真11. 金属製銚先. 類例7~9.  
(北海道大学北方生物圏フィールド科学  
センター植物園収蔵・画像提供)





## いしかり砂丘の風資料館紀要 投稿規定

### ■本紀要の目的

- ・石狩の自然と歴史を解明し、記録して残すこと。
- ・記録された成果を広く、永続的に公開し、学術の発展および市民による研究活動に供すること。

### ■原稿の内容

石狩（北海道石狩市とその周辺地域）に関わる自然や歴史、あるいは博物館に関する調査・研究、資料や標本の収集成果等について、論理的にまとめたもので、オリジナルな内容に限ります。

※本紀要は査読制ではありませんが、原稿の内容が本紀要への掲載に適切かどうか、編集担当者が検討させていただきます。必要に応じて修正をお願いすることがあります。

### ■原稿の種類

- ・論説 投稿者自身によるオリジナルで未公表の研究成果をまとめたもの。
- ・報告 調査・研究の過程で得られたオリジナルなデータ等の報告、新事実の簡単な報告など。
- ・資料 博物館資料、標本等に説明をつけたものなど。

### ■原稿の構成

- (1) 題名 日本語と英語を並記。
  - (2) 著者名 日本語と英語を並記。連絡先を明示する（所属先あるいは自宅等の住所）。
  - (3) 要旨 日本語で400字以内。英語を並記してもよい。論説以外では省略してもよい。
  - (4) キーワード 日本語で5語以内。英語を並記してもよい。
  - (5) 本文 原則として日本語。横書き。
  - (6) 引用文献 本文、図表等の中で引用した文献のみを、著者名のアルファベット順で記す。
  - (7) 図・表等 原則として白黒。簡潔な説明文を付ける。
- ※原稿の詳細な形式については、編集担当者にお問い合わせください。

### ■投稿資格

石狩の自然や歴史について調査・研究している方であれば、誰でも投稿できます。所属、職業、居住地等は問いません。

### ■投稿の際の注意

- ・投稿の前に、構想段階で、必ず編集担当者にご相談ください。
- ・内容の正確さについては、著者自身で責任をもって、十分に検討してください。
- ・題名や本文等の文字情報は、テキスト形式もしくはWord形式の電子ファイルで提出してください。
- ・図や写真は、十分な解像度をもった原版もしくは電子ファイル（一般的な画像形式もしくはPDF形式）で提出してください。原稿をWordで作成した場合も本文とは別に画像ファイルを提出してください。
- ・環境依存文字の使用は避けてください。
- ・別刷をご希望の方は、費用は著者負担とさせていただきます。ご了承ください。

### ■投稿先・連絡先

いしかり砂丘の風資料館 紀要編集担当（志賀）  
〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4  
電話 0133-62-3711  
mail bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

いしかり砂丘の風資料館 紀要  
第10巻

2020年7月31日発行

編集・発行 いしかり砂丘の風資料館  
(石狩市教育委員会 生涯学習部 文化財課)

〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

電話 0133-62-3711

mail [bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp](mailto:bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp)

印刷 (有)日孔社

©いしかり砂丘の風資料館, 2020

無断転載を禁じます。



# BULLETIN OF THE ISHIKARI LOCAL MUSEUM

## Volume 10

### CONTENTS

#### Article

- Shiga, K. : Annual changes of water amounts of vernal pools and abundance of fairy shrimp *Eubbranchipus uchidai* in the eastern part of Ishikari coastal forest, Hokkaido, Japan from the year 2007 to 2020 ...1

#### Reports

- Ishibashi, T. : Survey of *Echizen* stone-caved Guardian dogs distributed on the Japan Sea side of Hokkaido —Summary report— ...9

- Shiga, K. : Stranding records of sea turtles along the eastern coast of Ishikari Bay, Hokkaido, Japan ...33

- Arayama, C., Ishibashi, T. : Two kinds of newly discovered tools for salmon fishing used in the Ishikari River ...39

#### Pictorials

- Plastic pieces drifted on Ishikari Beach, Hokkaido, Japan ...i

- Japanese sea nettle observed on Ishikari Beach in 2019 ...iii